遠碧軒記花

15
676
1

1 5
6 7 6
1 2

臺影新地

上

遠碧軒記

古曰但有歲寒心兩三竿也豈唯竹而已哉景象之多少亦可然乎洛人黒川道祐以靜扁庵、有六景往歲余亦遐想顯詠焉頃間庵主寄書曰癸丑　禁闕之災庵罹池魚其景為烏有唯存四明遠碧之一而已既而新築小庵以遠碧名其軒願製一篇則為大幸余既老而懶然相識之旧不能緘口於是許曰喬木也菜圃也花鴟也

梨花也杉葉也前題所有雖堪慰眼皆是之四時之間不能無開落榮凋之變唯四明之碧遠而可以遣興幽而可以耽閑春則籠赤城之霞夏則寄白河之涼秋則擎楓宸之月冬則排杉洞之綠加旃旭日之映暮靄之簇雲霧之開煙嵐之染霏〻拂〻翳〻濛〻或問巫女夢或揚文君眉淡濃則濃雨奇晴好坐卧盈視早晚遶几實是我有而靜庵達觀也藕子所謂取之無

淡濃則濃四字不可読恐脫字

禁用之不竭者乎當言但有至樂心一箇景也足余聞四明山當王城艮方姑就艮山言之則篤実不動者山之體也身在靜庵對不動之山可謂外内偶當焉艮象不云乎思不出其位主人若頷之則艮其止余所評亦止於此延宝三年乙卯春正月黃半落日弘文學士院林叟記

遠碧軒記目録上

天象　地儀　時令
居所　神祇　寺院
官位　禮儀　人倫 并人体

天象

一前ゝ月大なれどうるふ月ありて知る天竜
二日白虎三日角露と
次第してうるふ月をこゝろ得べしかり



おの月小なれどうるふ月をこゝろ得べしかり
二日角露三日白虎四日天龍五日白虎六日
角露七日半雲と知れば次第を

一切の獣の角上に向ふ天此時は必角の頭小高
うなるもの故白虎を竜の日と時てなり
此くもやうに南雲人面となりて此時向ふ
ものを必定合なり

一十六夜　不知夜　八月をいふ
名ものいさよふ心を徘徊のんとして月あるやそ
ふ心と云義とかり通ふ雲ふも既雲とて

一十雲

韓五堂雪

○韓五大明の初め名なり雪の夜宿不相着
不〻行ふ心堂の井小て江南を討夜陰
るをわれ知らず

李懇准雪

○李懇という者大雪に乗れ淮城を討取なり

○池水あり鷹暗撃して合戦す鳧鴨多し

歐陽詩云

○歐陽永叔雪中朋友を集て酒食を供せし

蕭武羝云

○漢蘇武胡虜を討ずして合戦す敵生捕て洞の中へ投入て食物なきにより毛氈を引さき雪ともに食ふ羝羊集り乳を立武ず

あるにより十九年ぶりて漢の都へ帰れり

李及郊雪

○大雪の時李及が母あるじ寿る郎と云ふ郎の外出てあるじを迎ひとり出ずるあり

王献渓雪

○王献之名大雪の朝月明なりしに不図思立剡渓と云ふ所に住る戴安道居る戴ぶりて舟に乗て門まで行ける人に宿をかりて

問へば乗興来れども興尽きて帰るといふ
伊川門雪

○程伊川の両の子遊子楊子といふ二人の弟子大雪の中を通るを問ふ 其途中にて雪二尺許降積りをり

鄭縈驢雪

○鄭縈といふ者大雪の日驢馬にのり灞橋に出て詩を作る

袁安洛雪

○一年洛陽大雪深く積て家共崩るゝ由にて人〻雪をうち払ひ袁安の門をさして人を出す人〻皆袁安の雪をして凍死するをおもひ門を穿てみるに袁安臥して大鼾をかきてゐる故なり

孫康書雪

○孫康といふ者貧にて油かし雪の中にて書を集めてこれを読みたりにて書を読終り物識なり

地儀

○大峯のう吉野より東漸院三宝院を奥の蔵王へ八海権現より十一里かとこれを除くこと
されども山上を以て順路也又泥川といふ吉野
山の麓を大峯道なくてかなはず道なくて馬
に首をおふさてそ兵粮を活きてわくは泥川
まてそもくとおうそ東泥川より三里奥の
吉野川の源なり生まは吉野より八里奥源と

あり沢川よハ百姓多し曲物の細工をなす又
杉皮を葺きて壹ヶ又吉也萱の曲物あるをいと
おなりこれよりたいまつ大峯へ太里是を険阻ふて馬を
あるひ荷ふこと岩ほをつたひ岩ほを攀てそれを
踏てのぼるおもあり山伏ときいふものをこしらと
云ふを大岩のよふなるが是へ業門者ども廻ふ
ていくよへ汁よふなれハ先ふりてすゑ
ふハ地をそれきてたつまて渡へ汁ふて

あふやまも山伏ときいふものをふりてとと
もふり假よりふるをも山伏ハきふ頁面ふ
りて奇をよむ屏風岩ふといふものハをそ
ふりさて山よりハ家をいふものいくらもあり
杉まて面のもおかふふてハ帖数
あるとはきていくふもあり岡くかまをもきいも
ふり新ハ吉野のものふりて切れそて仏
あるをふり沢よりて沢山ふ焼ふ

なりとこらも山宮をセッ八ッある修行者
入て居るなり沖門脇に小篠という所に宮
ありて大権唐を修せし者を祀る
此像と役行者の本像山伏の体にて乞食ッ形り
乞おる也この宮おれ室まて堂おの護摩を修せ
扨大卒都婆より三井長吏之山探頭彼行者
まで子僧正誌と書付て沖場あるまで小篠八
頂上よりいかし乞ささなり此大峯は文言く

さむく六月廿日まて雪ありて山頂上の宮の
東むきの窓より朝晴日ある時ハ富士の山日と
相並て頂上すこしうあるふもとを見る
る事をかりすれども富士より こなたく遮る
山をなく大峯より北山とをしと志野うり
扨は宮の内の事をさいの屋さ申ます
這当をさく談決才好り来鬼 後鬼という
先祖を役行者の従立小武人あり 弐(斧)の事うり

もちて役行者峯を分ほとさに案内を乞
山人のまとうを別ふ帝の命にかとうるものもて
初吉野山ふ知行手石余りう今夜ふ味夜九所
代ふ移よて知り所のそものをして公儀へ出ス
きてさこ吉野へ撰所存に知りをへら押
を入さ紀折帝まもて藤九所捻地ちれ帝
まも千石余の内よりう又ふ石余ほうちもて
大方こ手石ほとふなりて又ふ石余ほうちもて
なりを知るふい皆こ儀へ

右ふれ初吉地ふ三十坊をある志
ら山伏と天台山伏とこ派ふる皆妻帯をり
大峯山上の宝古来より志ら山伏の宝まて
あり来りて天台山伏の宝い形しち僧の
を台山伏宝山をまた志ら山伏の宝をりて
いくらぬう形を近ツ比て台山伏の宝を立ぬる
を立時きとて大きふるそものをするより吉
野大峯い元来無野ら山ふ要地なり今吉

野は堂は南むき門を裏つを北むきおくて
門い南むきるり堂とをもむく仏向のつ大なり
石四倶なるるとむまつた大峯より吉野を過て
熊野へ出めける南へて南小りつをするり妙心
寺の南ふの門のんも也如本山聖護院門主の峯
入りはまつ熊野へ向いり支より奥北院れ吉野
大峯や上杉なりいたき坊まくき成ふ南山の流
ふい元吉野大峯と奥院より第りて如熊野へ

第る事なり當山の元聖宝めしまいるてと
なり吏ともふふ南一如之實院殿也ふ南山の
とれの本都婆ま大峯別南と書てけり聖つ
坊宮岩坊とうもりて大峯ハ之山の奥北院なり之
山別南と書ルは字も吉野の大峯別南とは合点
四ろね事と如南光坊ふ南の金剛小吉野の
かふらく成むと思ふ又云儀ふ一授変四へり
かふらのめり院主ふてて作甘荘厳院

を南之坊ゟ寄ル初千石余の加料を中古
以来之百石をはち俗ふ分ゟ之ゟ加ル又百石ゟ
頑学料并詰堂修理の料ゟ加ゟ之ゟ百石
を荘厳院へ分の退退ゟ加ゟ之て大坂〳〵南ふゟれ
なるかゟの家厳を修許訛ゟてゟゟく
修理の料ゟ又百石ゟそ仕り修理仕ゟ之ゟ分ゟ
荘厳院へ活りて残りハ修理料ゟ又
又云味ゟ云ハ化野 鳥部 山一作也 華頂山

狐塚 西院也
化也ハ処なくてあゟ名ゟ云ふまゟいし来ゟ
ゟも今考ゟ愛宕の一の峯居ゟり右へ行ゟ宕
の坂東ゟ西へ〳〵野ゟ云て人ゟ
やゟ宕ゟあり華頂山ゟ
倚ゟ行ゟ狐ゟ出ゟもの西ゟ出ゟて西院
ゟ焼料ゟゟ風ゟ京 祇園ゟ
ゟのゟゟものいふ丸ゟ〳〵ゟなり西院と

いふ古のもの此説と又ハ齋院と書て如
齋院の所と語てあまた今のごとく來
ハ齋宮をもいふ今妙心寺の十境てふ永安
祀とハ此ものハ齋宮をいふを可尋

一東山妙喜菴僧円月中岩修日本紀円月以
此説非也
日本為吳太伯之後夫太伯逃荊蛮断髪文身与
蛟龍共居其子孫来筑紫想必時人以為神
是天孫降于日向高千穂之謂乎當國人疑
而拒之者或有之欤是大已貴命不順服之
蛟欤
謂乎以其為交龍雜居故有海神交會之説
交蛟下同
蛟カ
乎其所齋持而来者或有墳典索丘科斗文
字欤故有天書神書竜書之説乎以其三以
天下讓故遂以三讓字掲于伊勢皇大神
宮乎其牽合附會雖如此似有其理若
為所謂天神之子者何不降畿邦而来
於西鄙蕞之僻地耶懿徳帝即位元年

者當周敬王十年而魯昭公三十三年
也是時蓋孔子年四十有二矣於是世
俗之說侖吾者迂曲傳會謂三善清行
引范史以日本為君子國所謂孔子欲
居九夷曰君子居之何陋之有是也蓋
君子幷懿德帝而又以乘桴浮海之嘆
為来于日本證

本朝高僧傳三十三
釋圓月号中巖相州鎌倉人姓平土
屋之族桓武天皇遠孫也自幼聲發
年至八歲投寿福寺為僧童延文六
年叡菴於萬寿東北之隅牓曰妙喜
世界（後移建仁）康安二年奉詔住建仁尋
董一重カ董等建長（重加翁曰釈圓月修國
史用太伯之説朝議禁正之矣又通
鑑前編周元王三年越滅吳下云自
太伯至夫差凡二十五世今日本亦

云吳太伯之後盖吳亡其支庶入海
爲倭是金氏亦無譽而言之元王三
年實我王第五孝昭三年也萬寻姓
氏録松野連出自吳王夫差也然則
支庶入海者松野之先耳 六十八版 裏牧之

○

霞谷と以ふ小添草又泉涌寺の開山の塔の
あり上の山をと云

○

今の二條乃なりそを大和大路と以ふを今の
かつらいといふものと混ずる誤の書分まゝ三條
大和大路の橋とあり即大和橋といふ伏之
より南部へ至る筋を大和大路と云ふ也
扨の道ゆふも大和大路よさしうまと云り

○

名誠井とも名誠の清水とも云水今は條通の
扇屋道祝が裏にありて今史を名あるよりもも
祇園會のときまてたゝこゝろみ六月
あるべし礼也下は来の日禊を除ふ

○聖護院森の東より下る處を大本川と云古
　京と唐田明神を勧請の文社記と云ふ
○大和の三ツ山を畝傍山　耳無山　天の久山
　朝日のあるときこれを三ツ山のかたちあるより
○西のたもと刑罪場の跡小宿跡と云田地の字を
　紙屋川と云ふ紙屋川をすきて西南の
　今も死亡人をすてゝ葬る事あり可歎哉
○西坂川と古記ふする坂川より東坂川
　ゆあり京極西より下る川なり一説ふる西坂川
　なりともふ紙屋川をいふとの説もあり此川
　るゝ古より暗川多く出て京へ入る也に
　川溝ありと東西の坂川とふの坊よふてなて
　九條へ出てゝ二ツ川と溝一筋ゝ成ゆへ
　と云ふ
○猫間中納言ふ猫寵ふといふ事もふ九條の屋敷
　可考沙石集ふ猫寵ふと云事のありと

○ 鷲峯れをつ小山蔭と云所 ありいち山蔭の中納
言称号の山蔭とてもちをもつ一 此外山蔭という
事可考 嵯峨小倉山下と云事あり是
今の公家の山本 称号ゝ

梭山本小河流大政大臣公寺也今の山本ハ
もるくた近世也其山も相国の称号ゝ

小倉と云を近所ゝれを西園寺を有欤

○ 矢瀬郷高弐百七十石施業院弘文院等の領
ゝり又小泉の宝光院領清朱千二十石の内も
八瀬ゝり少納言ハ瀬と百十七軒古き家ゝり
いにしえ小法師のちんのと云類れ名をなし百
七十軒のうちより多売を三十六撰もて
これおみか園名をつくる三十六人かまれを又撰て
その内一人これを頼母氏神のる神のるに頼ゝ侍
かふてる人人を三十六人の内へふ入八瀬 糸のとき
三十六人ハ浄衣白洋をもをもをんに

褻袍（素袍敷）
褻ハ古字ニ

子持すゝ〳〵年て褻袍を着を抱この布ハ天神の
御紋梨花菱へ多みつく九本より毛すじ
ハ左右おて書の体息布なり所〳〵貧窮の
体をてらし釜風呂をして病人をも治
治世よをすゝの事ハ好りなよより十支の形
才常に作て天邪を払ふ又山つの个放る山の
猿田彦二文の社を合て祭日先へ生神輿
八て神路のふさはこの文なり三十六人の

内一人ハ社人をつとむ毎年大晦日より文智也中畧
さて八瀬九人の髪
皇ちゝ〳〵ハ変小原入方を余と
謬伝へなる慧んの生身小て冥途へ
時えんかゝせいなるの二天童現して供奉を冥
官これをゝハ伝をとゝ
年一奇代の事る一人ハ方ゝ当亜た
きとなりを代よい安楽花の実を可きとて

安羅漢ニ
此實似梨子實至而奇麗ゟ香ニシテ服如柯琳花細如梨色白葉如梨

之粒あるふことを種まて菩提を発ふものハ
即滅無量罪と宣ふ事す推り帰まて安楽ちの
庭小植のふ今に之本ありて不枯葉の裏ゝ
実ありて菩提樹子ゝ似より大のふまうを
もふれ天竜の体をまをて髪をろく竜子
の体を表すと以ふ

○
鷲峯　鷲峯　天峯と次ぎを南ハ雪中ハ
鷲ハ小ハ天竺ハ舟波人の海辺多くハこれより

色ふ釜厩と以ふものその光甫辺お某園の
むろ手菴をかまへく某辺を立仕某の名ふ
某をまをて扣法別をとゆうその代ゝ禁裏
の浴湯を沸しまて献す今ハ京ゝ住まて禁
中ゟ下行ありその庭妻の前ゝ釜厩の
名まて名多
ありけり

○
富士の汾山と以ふの不知芝の字我書まてま
ゝ是ハ誤りとかく富士のすそ山のふ

小て云ふに對して志ろしめすと云
○
事かくとかや
○
今の崇竹の常徳ちのをを萩里といふ萩
の感小里色紫ふふりて紫ゆと云なり
近辺ふてを常徳ちの西の方ゆ萩多し
今いゑ〳〵比ゑて草も木も萩もなし
○
聖護院比森の西ふ 崇徳院と云田地の字を
てゆ里大炊里の東よりつゞる古ハ社ありと伸

今森の中まつるハ稲荷と熊野勝り
○
滝壺の小督の旧跡を天龍寺の川をくだり三軒茶
屋のうしの橋のやうなるをといへども更ゆいる
法輪ちへの渡りあり 松原の少ある所なり 巽
の尾山を云 ちの波ふまを首南尾なりふを
出かた南を入巽と伝よりふ竹の実幸の実二
等渡の前をも
○
七野歌

内也より平地まで小地なる柏地 蓮臺 紫地 上上地

七野ハ 宇多野 これハ大なる東寮後堤の内より宇多地と云あり この称より業平の石塔あり

畝野 俗にうねの とよぶ 栗栖野 蓮臺野

内野 柏地 これハ大報恩寺のおなり これを俗小柏地と云 今此寺ハ七地のそとゆふ これハ柏地と云 誤て俗て七地のそとゆふ

七野ハ 紫野 米野 小栗栖 萩野 薇蕨と云こゝろ

鷲峯のたまのお 蓮花野 ちをおまてうふ 蓮臺野しゐふ 唐スキ 野 これハ雲林

花の東南の角也 今此寺ハ七地の内 上野 鷲峯万日寺の東と云

ゆふ七地の土神をまつる社を七地社とゆふ

○

金陵都 四山皆内より向て五城をとり巡也 但

牛首山ハ外より肖城而外ハ山内続列無出亮

石成都 五雑俎ハ

これ内よりむかふ 外向と云ふるなり

○

下野国 烏山の巻ハ

磁石河 又出羽多地海山ハ 班栗石ありまこと

南ハ石ハ土ありて赤ハうもなり

○

下野国那須野中ハ 湯津にと中ハ古班

一基ありこれ朱鳥元年小建丁の招もよくいふ石
足事にやあらん筆跡も宜きこと那須西造の
碑ハ劣れりとす古くいふ大那日なの碑の始なり
まことに石戸城の名おて當あれ初の筒を埋む
一丁ハ長兼二年の歟識なる由事

○大和大路一の橋より一町を菅名と云芝宮と
紀伊と右邦の境をうしまでて南元地藏
今法興寺の小さ竹をう

○

と云ひりこれを古の名部山の火葬地也
古より名部山の人焼のはん坊小華屋杜の
坊とそそのまそうこ六波羅れ西の方小堂
つ云あり住を即名部山ふも火屋ありより
建仁寺の火屋一法あり又西の西の火屋へ
一ツまた有ありやう小堂つと云ハ古六波羅の
北の方の門のまた方を

○

鳥羽恵塚一ありやうの恵塚より十町ほと

南北東側の浄土寺根本の忠塚なり

并源波墓となり今の塚のほとりに鯉塚と

いう墓大なる池ありて大鯉魚ありて人をとる事

あり依て塚を築てこれを忠塚とおさめ

和泉国一宮なる是を忠塚とおさめ

○鳥羽恋塚と文覚上人造也

○今の清谷の小松谷と云所いにしへの主盛の

小松殿のほとりにありこれを三鳴権現小祠と

ありこれも重盛の勧請と云東山の地蔵尊の

ごとき物語さまざまあり地蔵尊大庄と重盛を世ふ

講ぜとうる所なり地蔵尊の本地を今の阿弥陀

の峯なるべしいうまでもなく山科の春山の

在所と阿弥陀観音勢至の見事なる大像あり

これら重盛の建立の阿弥陀堂のおもかげ

これを要害ておさめて灯籠を点じたるほど

へし是よりけんを阿弥陀の峯と云なるべし

は佛の先度法華宗乱の時より山上ならびに
今の玉石一郷人等をそそのかし法華宗中皆
をひこる法宗を滅却のんあまこる浄土宗を
はらはきこれを整号なる夫より山
科七方に町ごとの構の内に一向宗の一派
居し数千万人ありと夫へ志かけさる由ふ
阿弥陀の堂を焼うさまこふ阿弥陀あり先つ堂を
祝むとてそ像ふ矢を射うけるも逐ふ信徒

退散してうれた物の報ひかてたの佛を射る者の
流矢にあたりて逐に死に阿弥陀の罰と云ふ一
向宗ともふかくおそれ敬ふの底をそそひ京へ
よ勢て法華宗を散らさ踏ちらさ二十一ヶ寺の
内二ヶ寺今ふ断絶をしきうの事なり
此時より一向宗も山科を追て大坂へいくこと
うもの史より又京へ元ことなり小松谷のあたりの事
より滑若一ありふ口ふ池ありうれを
若松の池とそ今いふきを池なり

○小野の石神谷川の高橋より小山へ移す
大石ほり貫之ら奇しき
人の形とうち雲母みてあらんとなり
○竹生嶋縁起 湖海を
小海と撰也 島内と宮殿造月と白石与竹鳴琴
月と沖漁火也 勢田廊頭と白字治玉海浦光
尾と巳方ゟ流の意也 絃と
○建仁寺海宝の小の石橋を焼多橋として古しの

○雲ゟ焼多侍ゟの寮あるゟ又方丈の後ゟ小の
角の溝に妙法とゟ石ゟり相侍へて云ハ妙法と
ゟ尼このゟゟ御をゟれ死をゟりヤ一涙くて
根もゟしぬとゟふ而面をゟれを平ゟり石塔婆ふ
て表ゟ仏像ゟ又ハ戒名ゟをゟしとおゟる塊りて
ゟる角きゟり
○木曽のゟゟ一石ゟゟ麻をおくゟ法受ゟて衣ゟ
ゟ袴をも入ゟ法ゟ幾重もこれを重て岩次男女

の形もおろ〳〵不分明木曽の麻衣といふ
ふるくより常ハ木の実なとを食す実徳の粧
遠江守殿の記ありて正月よりおすえて仮を挙
動ものゝ多食する事也さて元祖の日忌とて
元祖の衣冠を戴くことをゆるされて郷の衣
冠なり庶の衣冠と似る事也此装束すべて
を昔為朝の人はなし一滴もうまる生まゝ代〳〵他姓を
不交〳〵古風なるもの不の名を可考

○三條橋六十弓橋柱のしるし毎三弓てこれ有
りて六弓ゝ橋基おのおのを十二弓短なる
也橋の幅をおよそ弓なり

○今の白川〳〵新道の左右の松ハ信長と安土小姓を
建て京より召つれきたる者をして山
中魂〳〵もゝもゝ道のほとりに植しとぞ

○淀橋ハ

○昔より定る七口の外後嵯峨院御宇始造橋也

三條　栗田口三條大橋へ出口　伏見口　大佛稲荷へ出口　鳥羽口

東寺へ出ル　七條丹波口橋本へ出ル

鞍馬口　若狭へ出口　大原口　白川江出ル　長坂口　丹波口杉木へかゝる　大徳寺出

京七口　并　伏見海道

東　栗田口　三条通大津へ出る又条橋巡より

滑冝誠まかり大津へかゝる山科より小関越右へ

内坤東寺ゟ　摂津路　大坂へ八渡油道　尼ヶ崎へ

山崎油屋　淀ヶ渚　八幡より河内國　打提村へ

もる山崎宮戸境より　播磨關境迄十八里まで

山崎より大坂京橋迄　七里并河

清藏口　丹波路　鷲ヶ峯　千束越

蓮臺野より丹波余野尻口出る　大文より満中

志誠丹波井戸村へ出ル　貴布祢社より丹波

岩の生村へ出る

丹波口　丹波路七条朱雀より亀山にかゝる又嗅

嵯峨より多尾へもかゝる仁和寺　鳥瀑より丹波

田尻へ出る雲宮本堂より丹波に出ル但牛馬ハ
不通　鞍馬口丹波路上加茂より大原へかゝり
丹波方に入東ハ近江国小川村葛川村へ出る
大原口　若狭路　今出川　八瀬　竜華越
近江朽木に拠る
荒神口　近江路　白川より山中越坂本へ出る
三条越ハ　麻ヶ谷より逢坂へ出る越ハ越と云
伏見海道と大和路　大佛道　竹田路ハ東洞院又

油小路　六地蔵と字治とへ近江人出る所なり
○八幡山五水
石清水　筒井　閼伽井　独鈷水
是也
その大徳を真珠庵ハ和泉式部ゟ旧居之地と和泉ゟ
井明ゟ名清泉也一休和尚屋永とかゝる二字抱
明りか賛申納之図得ゟ新宗云々殿之後よび井ゟ
なり此井を
名聖井と云
と云美種の母屋盤の居変

天智天皇の都をえたり内裏屋敷とて松
一村阿り天武天皇の都を西那と内とも新屋敷
林とよぶ小石ひとつの号田号持統天皇の邸い
志賀大伴黒主の家の名と阿り三井ち山上西那
志賀と清をも志賀ち郷阿り元ちの西坂ち流
のほあちと云寺の下の小菴の寺ち十王像と云
伝る有名えちの小堂ち誌旨孔明の像あり
種ちの妖怪ちあり……あちさけちとほ穿好ち

をくゆり名い志賀の入口ち十王阿り主要類故
……十王阿ち……ち孔明像を
右の十王と誤てゐふなり

○

八景

修学院　仲川記方久忠之元和亭　号泰庵
市原山　妙寿院惺窩
同　松永昌六
同八境　日人
同後篇　玉水西　芝庵
同　石川丈山　友古
東山泉涌寺　平巖仙桂
嵯峨　智積院僧正　其外寄合

稲荷　草山元政
同八景　下村兼腰
南良　延文年中公家亢和哥日断
近江　和哥陽明殿信尹公
同　道春
同　熊谷三郎
平野师子谷　儒月坡
駿河　熊谷了菴意閑
伏見八景歌　煙霞主人
加茂　題
同　黄檗高泉
同　相国寺朴長老
同　菅德菴玄同
同　草山元政
遠州初山　黄檗南禪師
神田　林梅
陸奥松嶋　鎌倉建長寺五代靈巖
塩竈　千賀漁父
紀州和哥浦　梅渓
住吉　桂草因
備前　三宅四三
讃岐八嶋　岡部拙斉玄及
豊州小倉　即非禪師
右者八景之分也
同　宮樹木散人
會津　山崎闇齋
明石浦　春齋　三行　春常　春德
尼崎　鵜飼石斉
阿波鳴門　南山禪師
筑前太宰　天閑独立

十景

修學院御薗　黃檗南源禪師
清水寺中編　僧元寄合
東山　大德寺桃巖
凸凹巢　卜境林道春
同　三宅可三
天竜寺　十境夢窓国師
西岡　青木元微
清水寺　御門跡方并五山衆
同後編　儒者寄合
泉涌寺　玉屋重　平巖仙桂
平岡　平巖仙桂
嵯峨山　冷泉爲景卿
愛宕　狂覚汗養拙斉
醍醐　煙霞主人

紫雲山　僧寄合
相国寺　十境題
東福寺　同
南禅寺　同
妙心寺　同
和泉　道春
須磨　渡部林菴
遠山初山　独湛禅師
宇治興正寺　十境幡竜禅師
建仁寺　同
万寿寺　同
大德寺　同
富田　隠元禅師
兵庫　鵜飼石斉
明石城　兼山
江戸湯嶋　道春

同　松永昌三

丹波　林梅洞

豊州小倉　即非禅師

右十景之分也

十二境

○凸凹巢　六〻山人丈山

同　同

同　松永昌三

日光山　道春

藝州清身堂　道春

清水寺　十二境　妙音　熊谷了菴

同　同　道春

同　春德

永室　松永昌三

禅林　僧寄合

宇治　題

難波　山本洞雲

同　悦山禅師

同　別傳

同　儒者寄合

江戸州學　杳壇也　林道春

八瀬　鵜飼金平

八幡山　熊谷了菴　立閑

吉野山　煙霞主人

有馬　恵林禅師

同　高泉禅師

同　智積院僧正運敬

伊勢神宮　刁寄合

越前永平寺　永平寺五代芙雲禅師

同　独立
高野山　十二境
右合九十八通

同　釈月坡
對馬　慈濟院

時令

○師邈（シバス）とは遥なりもろ〳〵の月と云事まて字訓の月と云心ハ旅人ともろ〳〵と云心ハ旅可考四月を睦月と云親族の義据ゑて

むつひ近くと云心と云へとも文まても初のんなり

○江戸市中のかさり竹を竹の葉とりて用ゐるなり
三河ゟて竹そゝの竹まて陣中ゟて立るなき例なり

○元日上巳　重午　重陽時相慶賀所以慶陽之陽感則何災尼乎

○子日遊　椒蒲萬花谷云正月七日登岳垂

心方得静陰陽気除煩悩之術也

○菅貫（スカヌキ）之茅輪

惣別六月祓と云事ハ夏の災より秋の金と移る火厄重なる故の災を祓するなり　右の茅輪ハ日相すて天地を表をこの輪をこゝもて天地の和合なるより別の世界へ入る即祓之

居所

○禁中正月ニカサリをするハ是ハ常住神事清浄ゆへ改もるゝ及さるの義なり

小笠原の家ハ門松ハ立ず　是ハ実なり

○近頃殿の内裏の内の清風ハ根なき方の時の伊勢寺ゝ風ハ安也　今ハ川の方の浮も風なり

古へハ町風なりそれを伊勢ものかゝまてをなりさてその近陽殿の風ハ竜山の岩よりのるゝと

うち櫻淨所ゝ久しくさびれ屋あそびて佛ぜざる止流の時
竜山さゝうち廢されて弥勒淨座くるもありて不
斷光院と名恵光院とも有寺櫻淨おの淨一の内さを
不斷光院てハ淨朱市別さゝてこゝの近ハ厩の
淨朱市をいふめり時こゝれもとりてゝを誇山のさき
伝も一淨入魂四つゝらゝ汝さるとゝ不斷光院さ
ハ代ゝ帝さゝの係ありて古さの内さも筑波集さ
入さるの三人さゝその内さゝ井一さゝるゝゝきハ臨昭と云

さゝうさゝ岑観さゝさゝうり智恵光院もこれゝ
根なとゝ西さ歌樂のあるをこれより分さゝる
ゝゝ是ゝさゝ寺領なりゝそハ太秦の勝鬘院兼
帯寺

○筏西家の居所冷泉西大宮ゝ阿弥陀もゝ
居ゝゝゝ城中院と云今消滅の小倉の下倶生神
のをを中院と云小倉ハ定家の山荘ゝゝ定家も
居住ゝゝくさゝを今ゝ中院とゝゝ定家の

京の宅いまの要法寺のあたりにて西向きにつくりて
よろづ京極といふ 孫二条 西りまで家ありて
二条家と云 谷のえの祖 徳倉の谷といまも
近比までは谷と云を後陽成院谷と云
勅令さて改

○

寺の三門の柱たち

もてあれ ○ このやうれ木にて
もて礎のするをのれ礎盤と云 ○
棡干の角のさうしのやうれものをたちをんと

云蓮のもをたちさうしなるものなりかゝるほこをび
たゝと云物を厨裏へんの木ごとり

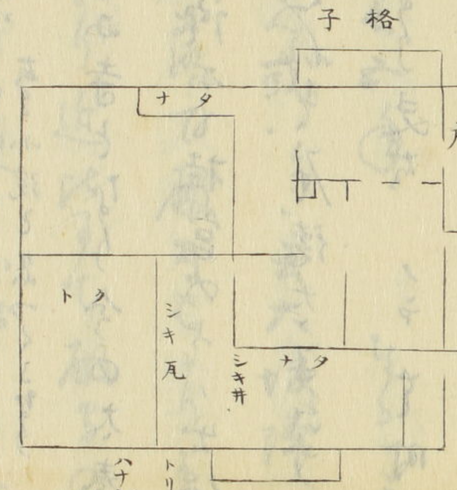
○

千木 知木共と俗名書なり 古記にハ加の株木
とゆり今も五郷ふ者物なり上古の麻相なる体
なり これをのこハのやり破風と云かつは木いはるかつ
ふのめくるをのりこれをそ千木のむりうしろ次木と
うの事るり中に千木経木を挿一する例を
千木もさゝをきふ須あり一て画する体るり

○ 案式部旧所を正親町東枢西頬東小庇小向て
初式部と云を遠云なるとて案式部と改又
一説に源一部よび案の上の事を指ていふ
也と案に号けるもいふ

○ 能の舞臺のそうを楽屋の幕さをより一尺
ばかりて一寸ずつ内へ入てもうけたるを
もう大夫も舞臺そうと称てふみたるより
略也明う方丈の室の図とりよわを好支の志の作と

○ 太秦の桂宮院かつら川の邊なる故に桂宮とも



桂宮とめふ本太子の南都より
帰出の時に住の殿之見太子伝

桂宮と云ハ　桂家と云ハ住吉太子の幼名ニ　天子の離宮とも
あるゝ小院と名つくるなり

なりし百ふ寺となり今の太秦の桂宮地これなり
源氏物語ふも桂宮のよゝ出の代ふ作りまる離
宮と云ふれて住徳太子六才の時多くの奇瑞を
あらはし史な　ノヲ　を時の体の童子の体を作る
太子の建立の寺をうれまぬ地ふて山ちハなし　太秦
天王ち住隆寺是なり　廃所の上の太子ハ
山上なり

○二條の城ハ初ふ本ニふ新ふ年号を考ふ
慶長十年ふてのるゝふもニ条城のるゝ西宮東
堀ハ家光之

なるゝち時代ちハ二条の城
のるゝふ或ハ云大坂陣後ふく作之殿
多型もふて殿ちとうを今の小幡六地蔵の
方のよなり近ふて殿ちの基ゆりそハ一面ふ
平均ふく西地とふ松ま守ふ定れ領の時ニ
条の殿守とふ定へひくその殿ちまゝなり

さて伏見の御所殿をその二条の殿ちくなし
て寛永神護ふその二条の城いまたとゝも
とゞめ初もちいさきみてちくなり
寛延三年八月六日二条殿守依雷火焼失也
禁中の黒こゝち仏檀ゆり給ふのこの二四
ち蓮花をかく そくく付くの御堂堂の佛を
お墨ちるあく色くのゝ六佛ゆり後ろ後光の
信の御時ゝ火ちくうね焼失 後光の光の初

淀よゝ友のゝちそれ弘誓ゆり仏とも
焼たい給ゝとゝ色なりてゝ深ゝなりて
上ゝ音なりゝ ゝ
のゝく焼ゝゝ未ゝて烟ゝて墓ゝより
おゝく墨戸の間とゝをの君仏檀なり
宗旨御墨戸君墨遺戸なり吏ゝ名
うゝを
○透波殿とゝい殿の上ゝ廊下ゝそ

人の為ならずと云ふ事を
○ すきやうことのと云
業平家二条坊門より南言念より西の言念
西ざかり柱なとかたもなくてちすき柱とこゝ
て仏をうるを伝ひの人のおもさゝ後ふ例の
ちらのやうをなるとん附ける封ず
として焼すも明 ゝ風あぬ
○ 今西洞院葉室長谷風吹古の木絵ちの跡ふて
その社ぢり伝来をうるこの社法即生害の

家なり
○ 御守殿と云ハ表向ゝ廊下ゝ座ゝ
○ 當方の屋形と
屋形とハ 元弘建武のころを下おほき
て丸にる時法ふ〳〵ふ幸をうる当ふ小鳴と
ふ所ゝ彼堂をうるゝ定林寺殿 頼真
物御車ぢり世治ふ入洛の時皆を屋形と
号しゝ君位ふ〳〵ゝ

勅定ふて給ぢり

きると云ふ然るに其ち波斯匿王子細有るよつて
王后波斯匿を打ち波那と云ふ名をうち
うし皇后の時のまゝ九柱なり大名の方面を
屋那と云ふ事是よりしめて法家さやう
中侍ふ高家さいふて八子細有るに可中と云ふ
但此家へ對
三管領の内のものを仁を屋形と申す事なり
中事い斟酌なり

○さて大佛殿の大縄屋のかしら南さやはをう
南川にて吸盃あり浄所屋敷と云法性寺入
屋敷の屋敷
る

○櫻御所いにしへの小屋敷にて此屋敷の結ち
の玄関い法華古き事なりとてのが動ろき
御屋敷にてありまゐることゝて二ヶ所のちかり二ヶ所
なり知恩院の末ちなり不断念佛と云
浄妙仏堂のかたより一ヶ所を知恵光院と申ふ

これを三石沖の寺領ありそ近傍
風のなき日これを伊勢伊勢宮の風きなり
沒する所あるを成すと
二条御城　寛永元年甲子築　小堀遠江守政一
五味備前守豊直　中坊左近　小野宗左衛門
渕浪主馬　　古　茂左衛門　各六人為奉行
營之

○

神祇

○八方荒神と云八方の神を祀るなるべし
荒神川原の
四つ辻にあり
○上の今宮八王子の社をもつむ事これより以下皆年中の記
神靈八社の事あり
をもつむ事也八社となして六神
を祭るや何れ是靈舍を設て祭を除くと云

奉祀ありきその御霊すて今宮いを後
も本社と今宮とを如此一号の八社のうち
火雷神井上ゐうちおきこのり弘文院の勢
ゝ真観の旧記ゝ従へ六社と呼び給ひを神と
井上ゐうちきこ余 〳〵又その八社ゝ従ひ
直備と宗乃て
たの二神の代ゝ入奉〳〵
聖霊会とゝふ時を天神を聖廟とゝか〳〵ハ下
通真伯も聖霊とゝふ奉きるれを是ゝ入〳〵

我しんとなり又今の八社ゝもこゝうて下乃の六柱と
宗道ゝ室とを右の二神の代ゝ入奉〳〵聖霊会と
ゝふ奉きなれを
又按吉田統和ゝとゝふものゝ御霊いな六神なる
をゝ後疫疾亦盛ゝ初ゝ時ゝ二神を加ゝて
呼びそれを伊豫親王と天神とゝ云ゝすゑた
又八神ゝもるゝと実事ゝを正ゝ拾芥抄も
八人の神の侍あるゝ兼良の時ゝも八社なり

ホムラノ社ニ随々下道ノ真備ト崇道天皇トヲモノ二神ノ代ニ入ベシ聖霊会ト云ベキナレハ是ニ入カエテ然シトナリ

今上御霊の神輿二社これを伊豫祝王と共に
皇后となりと社人いふ又下御霊も一社ここれ
伊豫親王なり是を八社の内ニて伊豫親王八社
三為因ふて八人の内のふ一来る故ニ神輿
なりをかつぐ事を慮仁の記録とり
出申候霊下御
乞申候霊ハ上の御霊の旅所なる由ニ上御霊
も古よりさいなるつりたとうる下御霊も近頃ニて

○今の新町西ニ出ル町ニ有ますりかつ
その町を御霊の町と云下御霊の別当のニハ
神輿の棟簡」　人とい神輿を再造をとる
なりそまつく慮仁のノ号有りとも也ニて御
霊も芝も慮仁よりハもれおのるとうる

○伊勢内宮の紋ニ屋体なり外宮の紋ニ車の
輪なりニふ也祇園天王の紋ニ木瓜なり書ニ
六月廿ニ日毎年神ニ内ニ木瓜大明神

と云一社なりは素戔烏尊と云をまた祇園なる
龜ヶ岡知恩院の内と凡生石と云石ありは
根本牛頭天王の降下の地ふて此石上山一時ふ
凡のたるおく凡るの奇瑞ありなるといふをれと
すつく凡生石とへつ今の栗田口の皇祇園と
同祈て栗田口
の境内ふをなるとと云

○祇園の木凡をさう
てゐるのとおもしくいの紋をあやまりなり扨
○鷲司殿の家さきりを忘弥る楊切さるる
をなを忘この考

吉田額

日本最初 日高日宮 筆者 清水谷 日本最上 南大神宮 筆者 清水谷
日本最上 神祇斉場 筆者 同上 日本国中三千余座 天神地祇八百万神 筆者 同上
大元宮 元本八神宮 筆者 同上 天照皇太神 宇気皇太神 妙善院宮子筆 日野家

○祇園社 此條通寺町と河原町との間の小例さりり

○ 七日の御神事の時は六人の隼人の隊をもいて旅宮
のおさ胡床をうけてあて神輿をもやそ
うたおもとて七度までの使をやるをもてなまの時
は社あさて神輿をそうし使者のたちさく到達を
とて神輿をおろしいやてをもうてれ供を調進
をとり

○ 祇園の祭礼の旅宮のもの古八鳥丸通六条二町
上の東側大蓮院の角（さと）を大政和屋（さと）

こ角（さと）大木の土の木何（さと）こと祇園の社（さと）
祇園の社の神を武塔神とかいをを大政和と云ふより
右の訛をとり訛へ来るなーけを素戔烏尊とこと
稲田姫の神輿（さと）みりこと今一社のかれ殿八鳥丸
二条二町目小学校（さと）旅宮の時も社を造加へおもと
記し雑記もその訛く記しおる度をはまき
ひ女とを待ふ

○ 今宮の御旅宮の東の川をる小社を姓言を

○ [illegible] 惟言と惟仁と位を爭ふ時
相撲つて [illegible] をもさとらるゝなどゝ困
緣ありてそに相撲ありた信仲を打社領
二ヶ所ありし地まい雲林院の主不の内と居とを
○祇園舍のを數の上を鶏なるハ諫鼓鉾なり函
谷鉾の說を不可し
菊水ハ費長房ヶ教さりて菊酒を汲人形を
放下鉾 放下する人形をまを鉾とを云なり

占出山 神功皇后三韓 退治のとき鮎をたりて
占をまをしめるなり
太子山 太子山へ今く天王の枝木を見てなり
變ありて
木賊山 やくさるをふ山の木のるより名を
ある秋のおれ月
芦苅山 君ありて [illegible] ありとをふまいとをる
なの浦いまみえ

花盗　　振袖を盗む体也

文の（諸）保昌み郎と云　祇園寺の辺盗山い友京の保昌宿屋の時を盗むを五郎一の体なり

射てめ〳〵里を射切一体こと也

山伏山　　浄花貴所大峯と入る体なり

天神山　　宰府へ天神左迁の時飛梅のもとに梅をおり添る体也

十四日

いそふ山　平氏字治合戦のとき笛吹浄名一来法師と頭とをたゝかうを体なるべし

黒主　　是を大伴撰と云

役行者　鬼神をとらへる心なり

葛城山　悪鬼を平くる心なり

観音山　長谷見の心なり

七日の祈　三韓未従十四日悉伏服して皇后を拘る体なり

○九月十六日の夜伊勢大神宮御齋会外宮人及政所姓条向を門中居参重氏部を

黒装束にて裾を右帯にかくし鈴緒ハ鳥
帽子狩衣白あの面にて立なから社司玉串を一
人ニて授くこれを榊に白木綿を切かけ鈴振
こんをとりて被ふり清祓のかんなりおはりて
玉串をたの御まへに奉て右の手笏を持ち初
めの如くおろし玉串の つ内へ入くたの方より出
さきの如く神前の階の上に高机のもとに来り
拍手の色と言机のもとをさる
拍手の六色の幣束を載玉くらんを取人いて一
ツ下りてすをとりてまき巻おくと山五色を神あ
供そこれそえて宮司楓へある子良の女子も白
きぬをきて檜扇をもちてあるこの文目いと位ゆ
成て長官よりい上のかの扉の
頭をひく教時より右のかさ成宮司もちてこの
頭を対をきりこの対い宮司と長官との相答こ
さて子良と宮司とちあくしてあくる間さも祓き
壁代かりそ内人宮司も子良も入とも宮より

下九人乃上十の祢宜内陣へ入をうちそ内陣の
燈挑をするなりそ内そ又内そ陣切りをおりて
宮司神道の被を脩て拍手を二度うちと庭
下より各拍手を佐子良退き祢宜のた声をさ次
ときそ宮司もそりはさもし性の勅使ハ階下にて
一拝つのさきみて一拝切り内その十七社の式も
おなじ性の人乃そ社のたそ立亀内そおみて
石もそ〳〵のよそ庵をする也十七祢宜の家宅てあり

を上皇をも宮と云二の祢宜ハ七宮より位そ服
生未きを二の祢宜これをつとそさして十人の閼
あきを長官の子ふてもも十歳目の形へ入そいて次
そ將任するなり切 下師と云ものいと方成と云
て町人ふて神前のるふかるてかゆふ事なり
さきそ十人の祢宜へ各をきそ有てお入〳〵ても
祢宜より被をうきて初語の檀那へ減るなり
し筒をくもる御師を大勝もつかと祢宜ハ上まる

を取てすゝなどゝは彼祢宜八憂宮山の六坊にて
御師八中衆のおくり坊中より札をうけて法方
へ祓る類なり其内こゝの御師迂宮のと紀琴
をもつゝ役の又吉机をもつゝ役のなど云て役を
はたもる家ゆゑなり
祢おのもにておゝ
道々をとを運もりふるまも
抱守姓の人内外文おて十祢宜と盃のとり屋里

かつまてもり
賀茂の競馬八中世皇后の病悩の祈祷さ初き
てより以来の事なりと云〻
小瞼(ケウ)興の事ゟ今
やとゝ後京良院ときふ貴布祢より犯婆来るを
汝中のい児驚てちやあくゝまるとゝて逃を
てはそ匂く疫を病てす時これい貴布祢祟
やてい神輿を造りきてそのま

各平念をそれ成ちやなくとふるこ
可考

○鳥居い岩戸へ神のかりをられるれる長明の
多その外法多をとる用ふしてこれをいて神をいさ
名て出ら新ゝ中ふ〳〵ら〳〵多る鳥のとり木
なり後世色〳〵の差別出来て伊勢のい
凡中のいさきをなし〳〵かさ木のかれぬきのあの
柱の外〳〵ふ出をかのの宮かいはのおとくまいあ〳〵

○感神院と云ふ伊勢とも云ふ神領ゝ又ハ牛頭天王
を勧請〳〵てるつる説をなり
伊勢一法外家の比丘尼来て内外の宝ゝ信て禅
を執行との時後ゝ比丘尼ゝ説のはなり元後ゝ二十
一度目の遷宮のなふぬをうて近江一ゝを勧進〳〵て
浅井郡の光ふて二十一度目の造営をとく因て
迂文上人と云浅井家ゝ定家と多須なり
このよ〳〵由結ふて秀吉公へとゝ説の内外宮の

とりはさまりて知行七百石余吉徳院の時
墓も後井ゐて造営有之又時々通行いたす
代々社司の山本氏より
ゆるされて社内お入もふ
勿論被
理を
係ハ山本氏より法事
係ニ万石いたすこのかを
郡内支配
三千石役料

分の衣物等を大祓と云を一度の祓りの如
きもの又十のものを九分の物の祓かて
清祓と云ふ相節分の如き宗源殿にて神官の
護摩行ひて其後其家（宗放）と押札を三手枚いあたえなり人々戸々
貼也

○上賀茂神山を守護神と云古くより氏人社家

の氏子鴨川筋より今の大文の字の氏子
社家を信じてあり氏子ありて氏子ありて
治て氏子ありて氏子ありて氏子居を移して社家氏子
その賀茂の氏馬場の氏もいなりしなり
おもふ大文の字の氏子本体と云在名
なりけて大文の賀茂の地まもて氏の神之祓幸
もこの道すりめてさの大文字の祓かいたく
ろひ衣裳をつゝためらる賀茂の業平ゝ云ゝ

人の墓も大文の表せる

○ 守宮神 これハ守宮なるの神のつの盲人の
ち瞽神もこの字こ

○ 天神十号相傳

好古　都卒天　阿弥陀
道良　焔魔宮　地藏
道信　楽変化天　文珠
道直　帝釋天　大日

道真　人間安楽寺　十一面
廣成　色無色天　釋迦
真直　他化自在天
直道　神々頭色々過去七佛之内
道實　四天王
良道　忉利天
南无大政威徳天満大自在天神

我。父母令出世一切衆生能引導道非二心於日
無

夜寒名知有應守護

心ふかきひとへのそでもわびしきに

南无正覚真道如来

慶長十七年季秋下旬吾　権中納言菅原朝臣　在判

○東寺のかたへの西例寺と云ふ古記あり古の
鷹くの武者の社とも大坂御陣と詠ぜし甲冑ふ
てこの寺をとふ馬ぬぎすてふ迎ふれて鷲
きて下馬ぞとぞ詠ぜる下遺もの也

士の幼稚の修行のうこの神体可考源家の鷹
の社なる由

○古小狂然ヌ獄舎ありこれて衆の罪を味て
主罪ハ狂然のト像のまゝて新罪この所ト
活早社とて神社ありこれて死活場をふ
事をして新罪の人を引とて古記書ありて
今主生前千お参拝融通念仏と今ふ以てもお
死活場ふと神社絶るあるこの支場一あつけて

○下の石神と云ふ名人の早世へ下司代
より米を以てとゞめしを以て見るに
もと下の石神と云ふ名ありし岩を高松殿へ献ぜし
ものゝ坊ゝ高松殿の乳母の不縁のそこに下の石神
と名ある坊ゝ東こゝの坊ゝ薩摩栗生蓮乗寺の
領なり良純と云ふこの上の石神屋敷ゝ丹羽家の
の母の風変なりまよう買ふ貴重今ゝ良純
も二月廿六日忌日ゝこの大旦那の乳母を惣持院

心月寿幼

○神乃の家ゝ心殿或をゝいと云ふまでゝ
竹生嶋縁起宮鳴冨士の心柱の心ふ用てゝ乳
天照太神と云

上賀茂の社司に春子と云社ゝり社のゝゝ清め
ゝゝこれを産婦のゝゝ産屋を免と云又血穢を
すゝとなりこれいさの春屋の子にゝゝ心民子と
云類ゝりまゝゝいゝゝ此家の春子いゝゝゝ

云賀茂すての翁なり

○光孝天皇の御時御夢と女人来接ぬて
御衾「」と云ふるまくを告世く祝ぎまつる名も
面白き和奇の浦波と詠て御夢醒れ給ふ
玉津嶋の明神なりんとて紀州を再臨しまふ
御平念なり玉津の津を略して續日本紀
ふり元恭の時宮を建てまつり聖武の時と
再興とぞ云ふなり伝ふるも今の社ふるて立木の
杜と云ふ伝ふ是の神体として多井畑の東野州
聞書ごとおぼ社のなど神を三柱玉津嶋と
書なり

○五條玉津寫真月十三日の縁日まて火焼ひり
紀列ふてい九月十三日をもの日とするよし
寫月十三日かゝ京までい南湯等の事ひり

○山階諸羽大明神俗蝉丸社也山階十八郷内有
一二三四号四宮也古諸羽字作両羽然則兒

屋根令太玉命乎為左右羽翼之神乎又案
對馬有諸羽姫神与是同歟乎

○上京今之御所旅所のうちに頼光の社有
町家のうちにあるとこの所古頼光の屋
敷とう西条文丁と云町なり頼光の屋敷
内よ有つる事八幡のなり多き事ども一説ニ
以之頼光を八幡よいわふる社とも云大徳
寺つゞ大なる軍八号冥羽なりとも疫疾な
もやる時猛なる事ども云ふり

○今之社家の説ふハ社を植武天皇のし系を
とりたての時より勧請の社なり十代ゝゝと
云ハさりての事ゝて神代を十代ゝゝと記を
道春の神社考ふも一条院の時疫神を祭て
ふにより即一条院豊ゝてゝゝと云沸割元
もさにての事とあり大なる病なり豊の
字ゝてハなし十代なるゝて疫神もさの

祈さむ〻〻〻り申絶なく今のそ宮の山代鳥居の
小〻方ちく小〻をそ〻別 亡牛頭天王也と云
さて加茂の齋と云もたゞみ〻つちの齋宮を
さそ〻ん子細なしとの宮の齋の宮は事なり
と云神名川古の西なり加茂の齋院をさな
祈と違と云ふ〻〻〻この社家のその説ふ
さの祈と苦齋宮を違をたゞ〻〻〻と
社説〻十代の神を今もお旧つ〻好平

城を宝と称嘆て世を挙て時めきも
別て祈らるゝと云さて今あいとうの宮と云ひ
相殿の宮と云ふ〻〻〻別相殿をきつるひ住吉
玄日平野をうつし相殿と云ひ天照太神のそ
命のまよいるぬるく今の今宮三社の内一
社八日吉ふて古の御輿振とゆりすてておきた
数を今私りあいをそれと云うたひ社家
の古近勤うさて以上の大宮も加茂の一社大宮

服なりこれ一をかぬ所も專一の社家の林大かもちもせうの類をこの家の日吉の神輿をぬすて雨とこれ語なり是て山王の大宮といふ所に神輿をかうすてこ事ハ此所よその事ハ大宮ハかぬ所の大宮

○下御霊上御霊もはすてあまたの御霊の系のる三代実録ニあまたとうめれとも始ハこの二社をさす上ハ下ハ

古を神宮ともかりにとうめ四ノ社僧を叡山へ
ほとゝぎす八社ともに火雷神を神社考ニも菅亟相との三を菅亟相の雷ニ
しの女書ニなきこと上御霊勧請より後のなれハ此時代ニ合めはゝなき
の三代実録ニ御霊の系のる所をも火雷ハなきことうハ誤のるなり
なり火雷神ハ火徒の神なれハ大已貴命の

事なりと社家の云ひ伝へなるを上加茂の霊
の告ひ断絶しやすきこと多かる神代の神を
保ちてをくより後世すてたるをそせめ
ものあく八社の社のまゝ一さ吉備公まうし大己
貴を祭るものゝ橋逸勢八律建岑と合并し
て三関をあく謀叛をきくむるものゝ又八社さ
へ云説あり此まゝの神霊八ちゝ改汰
法のまゝて神霊宮と云額のうちへ今
の最勝殿の額八閑齋なるゝ池所の額をとりて
来て掲ゝるのゝ又社傍ひなるふ八をゝ最勝講をと
行をたるもをたるゝ之来なり

○北野君天満大自在天神 泰徑山寺 佛鑑禪師

口口詰心和尚作賛其序曰明應元年口口口
有人猶立竜鳳之姿仙冠道服青口白臘(一作襴)肩
袈裟嚢袖梅花一朶瀟洒風流非人世所有
只敬見未遑問焉傍有人言是北野君入徑

山室受無準衣而醒矣詰旦告干藏光菴
普寛禪師体翁至應永元年甲戌佐菴主
忠菴持亜象来即所夢神也驚異寫之素
賛前南禪海寿書曰迺神叅佛鑑之起本
也或謂予云聖人無夢嚮之言不足信焉且
夫菅亟相延喜三年癸亥春以一甲子薨于
關西太宰府安楽寺至明徳庚午四百八十七
年佛鑑禪師来(宗)理宗淳右八年戊口示滅於徑
山退耕室我日本口口二年也至明徳庚午一百
四十三年彼此去代邈如矣豈及然乎予失笑
云神也者妙萬物而為言者也豈無夢感之口
盖凡人者見其所見不見所不見所以滞偏執
也且聖人無夢乎聖人有夢矣武丁夢賢人
莊周為胡蝶之言云周与胡蝶必有分矣佛世亦有之
尊者阿難七夢国王先尼十夢佛皆解之亜
口口乎況復亟相也化人化天神変自在也無

準也脱生脱死性相常然也□□語云死生之
（傺恐隊誤カ）傺如同遊戯繇是言之其相見幸 決矣夫七
字神号開闢以来鮮克解之者予以天之即
色究竟也大自在即摩訶摩醯首羅也華嚴
称色究竟梵網云四禅中摩醯首羅天釈命云
過淨居天有十位菩薩号大自在為大千界主
騎白牛而有八臂三月十住経云大自在天光明
勝一切衆生是則吾北野之神也應以普現
色身其観□□□耳菅丞相捐舘五百三十三
年永享乙卯二月六日巻夫社多作篇辞云
新一□日 主□□四禅 来也不道 曽無生縁
直昇神仙 左迂捐舘 五百余年 霊跋不変
感應□偏 □見双径 参徴幽玄 鉢□無底
袈裟韜天 □□□□□ □□□□
（不昧子）
（大雨）
巻夫宿八妙心寺 流僧

○神前へ弓や杖やなどのものを奉納のとき
これを願ひ…て奇瑞をえて物供ひ…て奉納
そのそれをとりもつと云神楽を合て右の事を
うらなひ…てこふ事…

○御霊屋に上の条礼の事…ひ…て事畢
鉾をさゝ…ひと人…て早くこれを斉の鉾と云
これを幸の鉾ともの泉ともいふ道祖神の事
とらも

○今の中御灵のおはす九条殿の屋表古へ要之の
屋表にて即要之ふ社ひの時ふ福大明神と
称を支を九条殿の屋表となる時ふ右の文をその
堀川の表町一条上ル福大明神の町…云く聚
楽の塚の告清の時ふ右の文をおほちの内
袖持院の門…云く今ハ仁寿の山の麓ふ祝て有
宗建按貫之を福大明神と称ふる

誤乱福大明神と名別し山陵名亦志にえへ
たり九条殿の在家宝水元年より後堀町へ
遷す彼社今後院の内と称りてそも福大
明神と称ふとなり

○下御霊略記

上下御霊右社者　桓武天皇建立ヤまつるの
記なり乞御霊の神文ニ右指玉ニ者ことを云ニ
ら由又三十六所ハ惜さる見而貞観年中自ニ
條玉ふ条神固氏子被定ぬ
玉ふ御中　祐社氏子ヤ事更無渭ちゝ
○吉備聖霊　山宗道天皇　仲麻呂　藤　薬原
大夫人（オホモノナキミ）　菅大夫（スガノチキミ）　橘大夫　文大夫
火雷神　山城玉訓郡乙訓郷玉弧在火雷神社也以上
四所右仁明天皇御宇勧請ニ
神泉苑ニ祭ラレてこれて御霊会
ハ事　委ニ代実録　巻目ニ詳り玉徳年中
ニ正一位を給り程ニ従ニ位ニ昇給ふく新編

当口宣ありて正一位宣旨
従五位下霊神一
貞奉授正一位ふ汎
藏人頭左中弁兼系頼房奉
○出雲大社勤番記曰即内藏寮受取上下宮人唱
為年久ふ
○観心則ち中ふ外住院階ふ社家名ふ変歴然ふ
ふ方勝定院殿　當社再興ふ時神輿赤新
○
被造ふて今株札ふふ
○讃岐金毘羅大権現ハ天竺の神ふて摩多羅神の影
○下京ふ後成の勧請の新玉津島社ふ象れ系直鳥
丸西へ入町南側ふ大坂塚ふ在信順買ふ山下春ふ
うれへ入ふ家を信順ふ代て守ふ近所ふ住
吉ふ小社ふりさ行れふ和ふ三神ふふ
○
日枝系直の固幡堂の内南側のふふに後
成の社ふ云ふふ人ふ

勧請人九ハ圭サ字一一かきら新く処を直ふ
文ふ法きる所一

○上賀茂る詞あく
の件物ゆり近江の安曇ふり鯉を当てそく
きるなり又利安曇ふ川ふり安曇と叫ふの又きん人
ゆ面を献をこれをそ代りさちう海をさきを延
宝に年まもこの文と又白鬚を献きる法なるさ
献きる時ありて事礼無なり二思儀なり又要心の
作年ノ無

○

甲賀ふ池の七良兵衛まて当春まて
濁る二思議こきれ法の方ハ名法なり

○

○晴明社の祭九月二十八日なり

○

○九の森北社これを何合法ニこれハ要のくおやの
神ふりおうふりてきる社まてすとこてこれら
以要の地まなり神秘ふて神体ふ名を申古か
社領なく社家ハ別さなりて社勢きん人ニ仰り
通まこの年の当ふ未ふさて女陰の乳を梁

来れる處とぞ云ものも神まこの母まて女陰の乳
母ゟり出湯百ぞ二十石ぞまを江戸へ仕上ぞ
神位ぞ迄次ゟりなるまて永代ぞまる元出乳母も
乳の社乳の妻こぞまこの次第お河合神
○
女性まて又童を着萱をむき結て着ふして首ぞ
○
く多き裏の中を御細しのふをうて人ぞ好
○
その多ぞまこ
○
俳諧の多居ぞ用これなくこれを云ふ元の
字を表一多る物なり天の字あぞまこれふい
出多居なる奴事こ
○
上京下り松の天神ぞ委縁起ゟり社内和多男
天神のお祝自作の十一面観音ゟり多火の消滅
と云なりこれを帯ぞまた多火の難を免ること
云伝上出雲剣をふまして水火の天神ぞ云
み条氏殿ぞ入まなし延宝四年六月十八日ぞ三十三年
目の采地なり法性坊俗云の自作の天神も

まりこの間小川屋菓子屋の大和勢
○延宝四年丙辰曠月木写成訖 近国家の語
春日正遷宮
先祓加持 日方
次遷行
次供神膳
次祝詞 兼直勤ム
次撤神膳
次勅使加持 兼連勤ム
次鎮座加持 兼連勤ム
次奉幣 兼連勤ム
次神楽
次清祓 向後三人兼連勤ム

次宗源行事
右祝部三人 神人九人 神楽役二人
神女二人
前駈太麻 勝敬 散米 但馬
神鈴 兼連 羽車 榊榊
○祇園の感神院ゟて宮事をおて京の子と
小児なるにこの京を授まて疫鬼を侵を
よりて京の子と云義ゟて額と朱をさすまゝ

唐の法と小児の額と八月朔日辰砂を点ぜん
疫なしと云ふ文要言にあり走水も亦
合せ又犬の子と云ふもあり魔ハ正法と害を
なすものこさんため犬の子なりて云て
魔の類と思ふ事て害をさやぬんがりかんにく
とせるも又馬のさまたげをなすもはし前天も
悪事をさくるものあこさせてはをきはをするも
あれたるものとこと勢ふるものこ

○内外宮とうくそこの説ありてもまた早急いかゝり
ぬ一まて奥さ海一まとうよれ説之神名秘書
云雄略即位廿二年戊午年豊受大神宮度
会の山田原小祠を神宮又号内宮
外宮志ふを山田原と外宮浄垂跡ありてよ
生徒名をまこと云ふをり

○神前ゝかゝりて九さゝのハ浦辺焼の中ゝ形ちんさゆの
ごとくして手形の本地の像をいへ

あるものこめやりの地蔵のごとの社酒神と
云酒のをもとんをそゝぐ次社と云
荒神ごとくあり泉涌ちの荒神ハ麤多羅
神なりこれい庵の神なり傳教の時唐より
守り来る麤多羅神の形とゝもに涌ちゐて
来迎院の荒神のごとを易四へ
○神道を大職冠より伊り譽く傳ふ書
太祖尊神者掌其鮮除之太諄辞而宣俾
以太占(フトマニ)之卜事而奉仕主神事之宗源也
神籬磐境(亦名天津)者吾国之神宝祖神之
真躰也以傳神録附属祭官意美麻
呂者慎而莫怠矣
大化六年六月一日　中臣朝臣鎌子
右文書今在吉田家宗建見ゝ記之傳
又按内閣相國基悠之所ゝ写ゝ件文
書如り

唯一神通制戒

○ 誇相傳可存用意事

○ 於法社祖宮等傳授事

○ 於俗倡者輒不可相傳事

○ 物忌事

○ 不戀木綿而不可向神祇事

右木綿者日蔭糸准之斎服者大忌小忌之通称之雖不着身服戀木綿則斎服也神宣曰不戀木綿者天如無日月地如無（三作不）載万物（以上之）冠戀烏帽子戀准之故必用之唯一神道一事受者用一筋二事受者用四組三事受者用八組不戀着此緒莫奉向神

○ 不可要吳邦之教法事

○ 面授以後切紙

右者三重面授以要書之旨以重位秘藏也

閣通終去件切紙可返本家実面授口決之
不可遺等端文路之故也

○於相伝受二重者可用白紙矣自面授口決者
以水雲紙可書写之
右水雲紙ハ神代之料紙為之日月房三星
宿降而写神代文字古紙之自尓以来改名
是称名紙秘要之切
紙密奏之御下知等可用此料紙也

万寿元年[甲]子月[日] 唯一長下部 兼延

[花押]

[加一筆]長元九年[乙]月廿[日] 神道長上 卜部 兼明

[加一筆]永長元年[丙]二月[日] 沙門行覚 [宇治殿]

[京極殿]
従一位仲通判 関白[殿]御通判

○萩系を神海灵社と云ハ烏丸の女なり天忍灵社を吉田の息女
家の妾となり吉田山に有り天忍を一旦将軍
家の妾となり細川出斎三剣も祀ると云ふ

とそこゐ

○祇薗南石鳥居感神院と書て額ゐり此寺始
の八重櫻三藐院信尹卿筆と傳ふ萬延元年寺を後八幡へ遷ゆ等純
親王今の額を八坂高院道晃法祝王筆なり
等純八伏見入乃宮貞敦親王次男也

○巻地ちとて祇園の南方居より南へ清水へ行く
みち高臺なるのいと南つゞみ西の方に在り路
松一本ゐり其を云なり已毎年

十二月十日百度参の時本社へ行ことを云ふ

○紀州 日前宮（ニチゼングウ ヒノクマノミヤ） 拷隈宮（ヒノクマ）とも云 神主紀国造

○熊野額

日本第一大霊験所

根本熊野三所権現

○熊野地主高倉下命 熊野氏ハ後なり

○下御霊社 日板垣氏部演して云ゝ上下御霊
共ゝ廼仁の乱ゝ社物悉ゝ紛失して無徴ゝゝ等

まてゝ多賀垣武天皇の時上出雲路と下出雲路と四社の
霊を勧請と申すと上御霊と下御霊とハ同時ふ
勧請とうもの仁明天皇のはて又四社を合せて
八社ゝる今出川より上の寺町をまての上出雲
路と云ハれより下を下出雲と申ふ中古ハ今の
新通迄のおもあゝる町ゝ社有り旅おゝ室町を
大一の町ゝ有り秀吉そのゝ頃その上下あゝ
かゝる比変ゝの時分ハ志ゝくと下御霊小神社
ゝ有時大方亡滅ふもおよそんするを傳ふり立
されゝる旅所ハを時より絶てそのゝ上御霊ゝり
ふ華ゝてゝ下御霊を以方のゝと云ゝれよ添路家
久と云有元来武士ゝて町人をして室町
通六町の内ゝ有ゝ人秀吉公のお頭人ゝて取拾
ゝてゝおてハなゝ上下各別と云ゝのふ宗久
代ゝ下御霊を管ゝて主ゝてハ七代なり代ゝ
百葉の上ゝて死ゝを書ゝの物ふもゝ下御霊のゝ

を代〻の古書物おさり夢て下とさるのハ七る年
来るゝ〻事有りて上洛昊の者と従文ゆや
とゆをともなりてるゝ〻ときて一社をなして石居化社
まてをいろゝ曲るとて南くるこの宗久ハ大つの
町と大丈居多るとさらもさ宗久ゝまを鉾を遺云
みて下洛ヨヘ送る今御昊より私る一年の鉾ハ
この宗久ゝ鉾なり特分子孫もなく又系の日
長柄の町よりこの時はも柄もさいさむなき城

宗久ゝまもり徒善提一寺て土さる形り生徒善
院の状をそ今さ下洛昊より拘その神輿を
徐定院義持寄進株簡有り直仁の礼かてめよ
善事と残るこさて社家を代〻吉京氏なり
生目天智を皇これる中統の時と甲斐の板垣信
方ハ病死子の法性帝を信渡害て跡皇信方の
子四法性帝ゝ遠仮の子母ともふ京へ落飛一後を
丹波と閑居をこの子城もして南禅寺の少林院一

主の家にて西宮とみよこれを室町より 肝要
にてかとにて社司とをよこれら中古伝ふの閑説なり
是らう傍形ありまそ系氏ハ代〻叙爵を神位を
西一位なふもとちうへきまそ頃ハ大炊頭の執奏
代〻の禁中へ云次今ハ云次なり上﨟霊を後
先の此の時初終寺家禁中方へ内縁ありより
これをこれ次ふうむ上﨟霊も中古より社司かる
中﨟霊の別当右近親ハ上﨟霊より当方居ふく
左近時より上﨟霊へとうんと後左近ヤすと
重親の私ハ不孝私まそ親の壌状ありとてふそその
ころ上﨟霊ら他の下﨟霊をも云(れ)なる押鈐をを
時分(ふ)の事あるそ事ふもる後左近ヤ祇楽まて
ありし代〻喧嘩変まて退散ふそいふ私と
上﨟霊より進退こと上下の﨟霊の序ハおるふう
その又菊相なり八社の内吉備そに霊ハるしといへとも
この子細も不伝そり火雷神を菅家といへとも

延喜式よハ八社の内霊坐り延喜式ハ時平作るまゝ
火雷神と菅家のいまゝ崇をする時よりのハ社
あり すまと誤るより還亡をゝも玄勝うるゆゑといゝ
ともこゝも誤なりもと形遇突智神のゆとるゝはし
初早良大宇治路より大和へ改葬の時まゝ後を
慕ひ氏と称ふ院を経まて御霊の内よ早良を
四へて慕ひ氏うをするをこゝも苦より大社と
多へく神明まも未社と勧請てあり上御霊の
社日ハ中絶の後を頃て七代下御霊ハ民部まて
四代なり今の民部ハ板垣氏なり
聖護院ゝ慕ゝ無聖権現も今一社ハ崇徳天皇と
称り書かゝのゝ東ゝ崇徳院の社遷とゝるゆより
すまゝ建仁寺の内よりする不り又云ゝ
もゝ勧請るものゝゝ観勝寺の藤の不
小天皇の画像あり
宗按観勝寺ハ行基ゝ開基ゝ也始在栗田

口山上近世僧正往演再興――て建於東山
恵性院中然而今恵性院観勝寺共絶在
安井内仍宗徳院御影安置件訪
愛宕山のお社の傍ら護摩の灰を捨る石の辺りを訴さ
小伝ちを禁ちん為め仏をおりなる石燈籠
の柱のやうなるに建ておくをこれをいつ
のころよりか時平大臣の墓と云伝へ誤伝と知れ社
お伊勢冊の誉めて信神とあるに八月廿四日死去
神代さながらにいさぎよきの誉信神の死を悲て
墓木花のおとろく再興せんにとて志をかたし
て葬ふとなり柏木の書き置きて花の開やう
こころのまゝにて仏の花ともなれ氏由依ふてやうさき
この花も変ることなきの事とそ見えていさぎよきのこと
斫(ツク)実を尊ぶ天を火のごとめき焼きて死を免
めるに産火をおとろのおよ禁するいと子細るり
火災を救ふ趣言もかく火跡ふてりるをもあり

人の祝と救いなり扨武家の宗の事
ま家并大平記東遊等の軍記かゝる物を細川政
元信仰して系統をつぶさにし武家の宗の
起なる始なるもの後信長と秀吉との時代より
専ら宗をさて勝軍地蔵とその法儀如等か
うくを一切純ふもくとなり何の時より勝軍の
二字を添るをもつて仏の化現ハ仏敵法敵
并悪魔降伏ハ刀及を用る事も皆くきるなんとも

実と地蔵の甲冑を着をきるのハある由
勝軍地蔵とて甲冑を帯る古仏多りこれ地蔵と
ハ言ん共なりを天部の仕なるくー薬師祇士十二天(仏)
の数とおもいる也扨右京坊とハ地をふて慶和
なる故と言地名の慶を称るものなるくー古き
一社の内く併(摂)祭るとうも地蔵ハ天竜元年と慶
俊社頭のお地なりとて参詣の老若さまを遠り
後のうなりおいうの社なりこの室町の末

榊の竹を不ハ有仁以おの忘ふこの屋おゐて今
柿の有る不そうり和ふまものもちく神事の時遥拝
の不なり今もうれを結ひて并を居り

○大和と河内の堺（境）金剛山より南傍山と云ふく神
武天皇の廟社ありて又入鹿の社より日本武尊の社
宝来一ゑゝく日本武尊の社より武蔵くれ
江戸神田明神をねり門といてもなれおていまる
また日本武尊ふてまる一ととる

○小野の廻廊のうちまる白きまの社をこれいと
伊勢の内宮の御師なりのうく白きまの未孫有り
この白きまる菅家ふおゐて入魂のに申ふ供をう
安楽の花のふまる上の御前宮下の御前宮の参
ふて上申禁野を大仏三村く上が成りもの多かる辺
まても西傳寺村より不均く
小野紅梅殿と云ハ釈迦堂の小面さ有りを世う
以ふ紅梅殿とうく天王ちの南例ふまるも姉く

一の文と云ふ
小野社人百石ハ松梅院一人して進退を
云ふ
云代ハおまてハ法印なり中絶して今梅ハと
梅宮の間その竹ゑ一林ハ和泉宗より松梅院を
てる事も多くとも云ふ
司の性なりてありとも妙義院ハこれより妙く
徳坂院ハ松梅院一代の法名こさて村上天皇の御
十阿吉道と云ふ別当なりしものゝ子に人

なり石連て系図ハ三方と並の系をしさ
未廣をゝ氏ハ人の未今の文ヲ見て社端常或ハ佐とも
敬とゝて氏姓の通字のゑ家の役ハ並ふ未廣を
のもの物ゝ物文子と云ふものゝ天神のゝうに紛
ものゝて文ハ死を即ゝ天神ゝいゝて今の文子の
三神として西京の清供ハの西の側町並の西ふ
松木二本ある内ゝ小社ハり今その西ハなけ
ゑとゝ神楽をすゝもる神子を代ゝ文子と云ふ

初西京より至典松まで菅神の車副の舎人の子
孫なる白丁各参人ずつ髪をかうぶりに清ふ今まで未だ
人絶ずして未社の数ほど数減をとるること又子社へ特に
遥厳助度の裏町の西例今意山と云医ちの面前
前に宮ハ延宝九の比を八十人余なり

○水無瀬 後鳥羽の供物を宝て墓ごのを置上ふ
置と宝て老烏来啄供物る時の八墓の場をけとも
よく知て不啄希なり貞享元年 五月ご破となり
大事ご堂ごと苦ようにアたさより禁中より行待
ご大般若を特渡ら行分又供物を備るご又破ら帳
帳となり 内仕許不の 伊勢内宮大事の前ぬ式なり

寺院

○雲林院ハ天子の遠忌の為に菩薩構と云事あり又科ある我自後砌砌天皇大徳を尓ら事ハり

○今毘沙門堂ハ本安祥寺の内なり安祥ハこの地を法の為ハさる

○鳥羽安楽寿院ハ智積院のうちに新造院と云ふ又の塔の堂の事ハて皆ゝ義福

門院なり御新なりとあり又かくある堂を本
御堂とそてこれを羽の御新なり又八条院の
新なるなりさて又重の塔の寺号ハ又智の如来こ
うり寺領なり御願寺なり天台宗にて妻帯
○六角堂ハ此坊そうり道通なり三坊あもとも浄土宗さてこ
をりて居るかこ彼仏院もそのありこ近比そての
老僧ハ専光とそて今のハ専誉と専の字をり字こ
申目見ハ立花右仕まるなりを向かの頃ニ在ハ
○
寺板金仔賀度よりかる志なる志彼免許
なり根本ハ三管領の新渡の画巻なり号氏の在
しき今の御所のハ猫のかなまこ新渡なこも
しかるこ居さるかこの後禅なる我まこ
動うりて移地をきりてその波を頻世こきなる
好こ今の建仁寺堂をその後なるをその
まつい京の荒て焼のなるもなく十二時もれるき
かより近かよい撞ききを打ちて告て時をしる

勢ある方ともいえられても種ハかくこと御りて
○天古大師天名の三大部の内止観の雲照中のこ
論をふるゝ不云々所々まゝ加りまを
猿
猿(表も)引も伝教大師の作の猿(猿)るりなの栗田口の
部〳〵き抄なり中古ハ青つゝみて通ん志就て
居る今ハ改家初〳〵を上のえこ大師の堂ハ多賀
備正初〳〵この備正も多賀ふて五百石ゝと永録
日聖屋子ふなり

○高聖山金剛峯寺始成院号口百間金寺
改るもの備二百余一人して二三ヶ院もかく曽
ものなり貴子を合きて五百人もなる
頃学科一百ゝ八ッ者のなり
聖方　院百口五十　備ハ三千余口り
行人方　院二ま口五百　備ハ六七千口り
客僧　院百口ま十　備千人もなり
以上知行ハ二万ふ石余なり

○七堂ハ山門 佛殿 法堂 庫裏 僧堂
浴室 東司

○天台の五山を祇園精舎 竹林精舎 大林
精舎 誓多林寺 那蘭陀寺
震旦の五山を 径山 雪竇山 天童 靈隠
淨慈也 天界者為五山之上
日本京城五山を 天龍 (又亀山) 相国 (万年山) 建
仁東山 東海 (慧日一本に海作福) 萬壽 (依る九寺を内南禅寺山号)

禅 瑞竜山 唯天界之例居五山之上関東五山者
建長 (巨福山) 圓覺 瑞泉 寿福 亀谷山 淨智
(金峯山) 淨妙寺 稲荷山 又尼寺 五山者
景愛寺 護念寺 檀林寺 惠林寺 通
玄寺也

○薪の南浦のまこ妙徠菴より領八十石と共に先年の
かい賀中納言殿より大灯の墨跡をもとめ給ひしの約
束の金子五十おうを毎年 修理料として参るまゝ

山林も何ら俗十人ありて住そよき寺こ一休酬恩菴
をたてゝよりあつく南浦の寺といわるゝ一休のもの
やうくなる大徳寺天珠菴と右流のやうこなるを今六
き珠菴ゝ末ちと称り薪の元屋こ新氏のもの方
一休以来の旦那ふて寺のものをもつて寺物も俗
と立合て衆封をなる今度 文宝六年 薪の寺僧こ丸
山の人うりて物をも沽却するを玉珠菴より
右の新氏の人こ脇をして公儀へ訴ゆる儀の
裁拳寺僧を非こおもの玉珠菴を来るふて可り
なるゝおちの薪を新意こまり参て配曲事とて
叱る新氏ハ俗家そして寺のものをいゝ処又
曲事こ以衆封の内へ入る事も無用となり
薪の一休のもを大徳寺の世末まて玉珠菴ハ多分
とゝてお寺こ薪をつきのるの乃ち川なるを薪田
舎由てふ石調法ふして今ハ玉珠菴の末寺さなる

○無類詩こ平等院こ幼幸の詩添経洛大江匡房

寺の詩あり太極殿新成の詩も右の五人の作あり
又世ゝ遊と云の詩数首あり世ゝも延喜年
中中書大王の寝宮あり毎日遊禅林寺住性
入道殿下の詩あり遊遍照寺藤原明衡の作あり
遊清水寺住性寺入道の作あり浄土寺仏厘
東山なり又小山ありて浄土寺多宝塔あり摂州
青竜寺又天竺寺と云あり不知処至玉雲
石寺灵峯(十)と藤原明衡ら詩あり住吉道路
寺ありても古ちとらへて無類詩ども多し
○東寺の西のそとかわらに古き門をたて慶賀つと
いふ大師堂より高野参向の時ここに宿す
の東のそとかわらに築地の穴門を造生つとふ
あれより不律の僧とを追放をかくのごとき事ぞの
門をとるふとやらん名づけり弘法守多院崩御
の時泉涌寺へ御幸のつなり右の畜生つよう
今度の法林院をも大衆の為かて

衣を剥寺中より西の方へ廻り大仏堂の門
前を去ること西より南築地のほとりへ竹杖にて
二打ち之を退て高生つよりおそるゝなり
○北五尼の浄所の瑞竜を厩を秀吉公の御息女
とも又八秀次公の内室とも云三百石余の住寺
宗入江殿ハ二百石余りなり御息女ハ鷹山の御
てこれを浄土宗なり
○
越前より親鸞汎ち三門徒と云なり鰐江寺迎
寺中野常照寺清泰寺頭毫摂寺この三門徒を
東西つゝ不構音達坐のほとりて官位をもとめ
佛光寺高田派 不取 鰐江 越前 称徳寺
江州寺山これを世ゝ三門徒
○越前鰐江称照寺も三門徒の門ニ
○親鸞上人門葉三派の次第
佛光寺第一創者仁皇八十四代順徳院御宇
建暦二年於山州 山科郷 即カ 建立開山親鸞

聖人心十文ミ時也

高田專修寺事創云仁皇八十五代後堀川院

○寺宇嘉祿二年於下野国建立開山五十七才

ミ時ニ其刻佛光寺二代真佛上人ミ云徒

弟顯智上人附属也

本願寺開基云人皇八十九代亀山院寺宇

文永九年於山州大谷建立矣由依ミ本記

言田專修寺ミミ親鸞聖人迂化十一年後

○聖人ミ息女尼覺信建立

○河内天野山弘法開基ミ和のヤなり南朝後村

ミ帝二の許ミ皇居被ふ許親心寺ミうつされてこま

ふて帝の御陵もいやまさりぬ

○天野山摩尼院ミ楠ヶ軍書二十巻ミ成或人

の招國ふて大歡喜殿の御時南光坊をもの

一本ニ誹謗ヲ寺僧ニ作

修理再興を許詔ミ。江戸へ寺僧

寺中の摩尼院一ヶ所ひらくるをも再

もとゝ寺このなも南光坊ゝゝゝれたゝ又
も止ゝこゝ院も寺ふを江戸へきゝ名ふ四谷
弾厩一西ゝうきさもくいちへ法華ゝ
厩この所を信仰おて色この施ねもゝりこの
おもむさまをなとゝゝにゝ卯へさ
寺多厩弾のまハ作ゝとゝて寺戸の刑法度
の婚ゝなる答なり今ハ延宝六年十六七文の人
○法音院ゝ後ふ音院の時ゝ泉涌寺法音院
少て二百疋多自をかゝりゝゝる勾當内侍の勧修
寺中納言厩のゆゝゝゝ神判有可尋

泉涌寺楊貴妃観世音像ゝ法額 唐ノ玄宗帝ノ宸筆ト云フ

コノ額ノ右ノ方ノ
ソノ外ニ修理添
施主沙弥明達ト有
左ノ方ノ
ソノ外ニ
昔當時比丘湛海再渡来朝寛喜六年夏六月比将来
観世音光額盤但来刻字今維那比丘尼思照建治二年
季秋九月幹縁刻字神薄懸阿

補陀海山
圓通寶閣

此観音ハ唐玄宗為貴妃建立ニヨリ世ニ楊貴妃観世音ト云フ

泉涌寺の善慈院の小谷ゝ寺子尼の墓と慈

和尚の墓と並てひとつ古きものありて
地ぞるよりこの所に許こぼる所也古墳の考

今見るは一墓の塔を二ツ〻かてをさしとゝ
信ぢるよりの墓ぅ傳子孫ありてもあるまし

○補陀落寺と云 按伴愛宕郡 靜原の辺にアリ 今無〻
有日跡云〻見山城名勝志 十二下

○泉涌寺の額の泉涌の二字ハ張即之なり寺も
冗山後荷(ニヨウ)のまと云傳ふ時代合ざる可考
惣門の東山の字も即之と云傳ふ

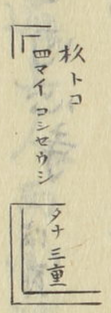
○聖護院の先代も一二代も如意寺と云稱号ありし
如意ざると云て即東山の如意山嶽也本領ありて
ありつゞけ如意寺ともいふ岩坊ぅ號之
聖護院と三寶院と毎ぃ事ぁり本山の重ぃ小
ぢ峯入と云ふりぁり為山の三宝院ぼ峯入と云
事ハぢ家るゝ志ぅ数を三宝院の方よりハ重
護院の方ぢ峯入をえさるを聖寶ぢ〻めて入
るゝふ大蛇をきりぼさんとかゝる又峯の初ぢと
云

三寶院峯入の大峯より大なる木札を立たるを
書付の仕やうは〳〵て墨つと同めくと書れる
を墨つより色うすきと云そも〳〵本と理性院に有
人より三寶院にうつるものなり

○
花の庫と云八金竜寺と云延暦年中に菅賢
を安置の所なりの比い尼寺と云千観内供
信をられ〳〵と池中に竜の形を現じて
○
千観を曲饒をなすの時より金竜寺と云転訛

来りぬを悪〳〵放をよ〳〵より花の寺と唱
延宝六年二月二十三日に三百三十年目に開帳也
月十四日に京より四里ほどうつる又大金堅の膀持
寺もこれのうちとぞ
○
竜山の妹尼とて入口の傍所の住なりこの尼が
大力みて庫上く一間ほどの大石をうち堅をを
自由り運ぶるをれ(軽)
又より今にて七代祖より浄土宗にて古松善

東求堂


ヒガシ
ニシ
キタ
ミナミ
ヒガシ
ニシ
キタ
ミナミ
ヒガシ
ニシ
キタ
ミナミ

東大寺三藏ニ日本惣国分寺と云古額勅額こ
東大寺謂四聖同心寺　（改歴聖武行基朗元）
招提寺ハ鑑真の住居所也昔ハ西大寺東大寺
南大寺小大寺とゝもに招提寺ハ七大寺のかと云
へともちそへる西大寺ハ後ハ招提寺ハ東寺
寺ハ東寺あふこれより西大寺を勤るなり
海龍大ちも西大寺のま流（風）なり
知恩院ハ後柏原院の勅書ニ日本惣本寺となり

一本ニ流作風

いさゝ次の年乃ち世を破却ぞ（ぎ）ともおもはれ
焼天寺先祖ゝ法の勤をさゝゝの日文書まく
西親町院の行ふこれハ今ハ存すこれをゝせう
れぬハ惜事ゝ
一夜道場とやハ古き文像画ゝ今も時
宗の寺おて福田寺と称ハ長講堂の後の後の
内ゝゝゝ一遍上人西玉行脚の日下ゝけゝ一夜
岩ゝ野ゝ寺夜ゝてハ市の字ハ誤りを

指月山般舟院を四条坂川院の南北佛金
寺と称して禁中墓戸とさだまりてその通をかうの深草安
楽寿院の許へ云く氏許も天子代々火葬の
ところ氏御遺骨を納る御廟もうるをその
安楽寿院と云を伏見へ云うて坂川の時般
舟三昧の法を修せしより安楽寿院とハ云
般舟院と云ふこと御廟のある処ゆゑの名さ
もりて涼菴のを安楽寿院と云もり後上御
門院の御時中興せし後京良院の御時くこのち
伏見まで参上を何もかも焼後拾条院御時々
別義なく正親町院の御時守の上京へ移る
百二十ヶ年程ゆゑなもり西親町院陽光院
後陽成院の御墓所もり開山を勅諡円慈玄
和尚九月九日遷化ゆゑ正親町院のお按
土御門院の御時の人数二世実空素尚和尚
第十一世悦空等徴和尚の時伏見よりもう〳〵

云ふ後ろ高く中に真開山堂あり
石上寺　後小路大宮西へ入町　イワカミト云ふ野の
悉地院　いふもの住を石上と唱ふるも
実は石上寺の坊舎を善宗なり
北殿司の寺東福寺かてもちゐとをれ明院
の寮舎うつりし人の時堂上をを後ハ再興
東福寺の堂とりくるを
根本山門佛殿法堂東司僧堂のこふて方丈

通天をふるる後さそ尾を亘天橋もちゐめなくて
谷へをりて出くこの橋ハ昔吸国師の作かて額ハ即
普明の自跡なり　方丈文庫裡　安楽寺の建立なり
山号の額ハ勝定院殿とも　印の門ハ義持
とゝみを普明ハ夢窓の俗なり　東福の塔頭
も古へてさ玄の庵ハ　さなりてとゝさ寺さなり
たるハたるゝ後のるゝ　学乐閣も一條殿の建立へ
芳陀利華院なとハ一条殿の御教とうも　九条殿

の石塔なりとぞ今史伝巻九条
殿の宿坊海蔵院ハ近衛殿の坊と

○東福寺の五大堂ハ東福寺
その古をふるとゞめりなをゝ引とゝなりつゝの大工
ゆゝしくセカのこのれを毎月四日家ごとにまゐ
ませたのゝしるしとて七カと書て五大堂の氏子の
ん（カ）といふるゝ生二神（ママ）をゝ紀後玉橋垣の角に
九品山墓地をゝ云ゝハ浄土宗ハいと云宗なり

古橋垣の老女伝ゝこのゝハ大職冠の裔太宰
大弐藤原興範ゝ訴建ゝこの橋垣の老女ゝ墓
お童の石塔ゝて　未ゝ下もゝりたまひ
薩摩陣の時秀吉ゝ級奉て細川三斎よゝ
れて芦をゝる歟後ゝ薩陣の時肥後熊本の
城て三斎よゝれゝ塔をゝ康清正ゝをゝ
俚山ゝり芦を三斎ゝれゝ塔なゝハとり
よゝ女ゝりのとゝする古河川誠中殿城地係領

の時水の西へかへされて即堂元社も建立とそ
さまとも残ハなし延宝七年ニ荒木助右衛門
そ今細川の家臣の妹夫のよめ孫を連く
路を先き寺賢長老ニ頼なり
○
そのこの宝慈寺ニ古の景雲寺の一境頃なり
寺ハそてこの境頃のこりこれさ右の釈迦
無仏と仏画の木像とあり西加茂村て三十石領
あり年牌ニ景雲寺開基永無老老永仁ニ
戊戌歳十一月二十八日示寂世寿七十六号宝延宝乙未七年
巳得三百八十二歳無分初名無着幼名千代紙松の木
嶋ハ右衛門の石ニ井ありニ無着ノ二の井ニ云ふ
ニされ松の木嶋ハ今の本隆寺ニ云ふ慈湖の流れ林
の無着の小伝ハ美濃の住のとき千代の生ニ女
桶のそこぬきてみたもれ松と月も見ニ涙を流れ
一井この所ニさるりと云伝とかりり可考
佛光国師示寂弘安九丙戌年九月三日世寿

八十一今玄延宝七己未年 既得 三百九十四歳

○京都 尼五山景愛寺 無学尼長老 佛光国師ともいふ 通玄尼寺（院又号通玄寺） 護念尼寺 恵林尼寺 檀林尼寺 皆禅師之而六十余寺ありといふ大明三宝未滅の時一枝たりて未朝の時一枝たりて未だ其作壇のおもむきは仏羅のやうなる末だ一枝枯そこれを時の仏師たりて三十三体佛を作る釈尊と観音なりは仏をあらはせる不空羂索なりは仏をあらはせるなりより隠元来朝の時一枝たりて未だ其

○二尊院 般若院 遺迎院 庐山寺 八宗兼学の天台宗 浄土禅也されども八大方天台宗うちて叡山のやうなるもの好ものともなり通用の寺と殊に二尊院も江戸上世のやうなりものと二尊院小さき月輪兼実の仰ぬて宅

○檗てんのまゝ 檗山萬福寺を遺物と
法皇様一上らるゝ今度延宝二年泉涌寺へ行幸ありて嘗を佛
建立なり

間法眼ら衆の足元きの
○
法然の像を画くこと
法然日んなく法然の
まて足をるまで
○
きりまを法然
なまた畫像の足をう
うれを足曳の影と云
○
長元縁記ハ訂書ハ
伝こ要ス大智院実祝の
ゆり此縁起を昂為照
もちふハ四る余ス
冊改の正れ学照寺ハ
お家して鳥羽の皇后
院皇昂開山之日本
院祝ること
○
寺町の和多式部を

未だ止ず叮のも祖もロ
○
日蓮宗の事　日蓮　日朗　日蔵
日朗日蔵ゑくより〳〵て法つ徒ヨ多ろ日朗ハ実来
の仏亜をうろ〳〵もろ家今のおもちを
を時分ハ孫念なりとうも日朗〳〵日蓮ま
許おの法華経をうもう立像の今のおもちかる
釈迦の像うを遠ろる日朗をおもちの開ふり
そろてろもろうとはちふ兵ろまたろは又ろ

この事子の日亜うなおもちの宗くうの住職とり
さて日蔵ハ孫弟子なれろ日蓮聖切ふて京於の
仏亜と中なるこれ妙顕ちの開基ふて修物
開山なり日堂の遠状もあり京ふて法華宗の
宗初の祖として根本妙顕ちと中さる法華宗祖
本ハ総芳り妙顕ちの日蔵　大覚　朗原
日亮ふてハ一段なくて徐労のこなるとこの寺
子ろ月明と云人初て一致と説うれを場ひて

うつくしき僧のちをねまて立る徐労流ち能寺
妙華ち本隊ちなり又寂光ち妙多ち本禅ち
要法ち妙由ち徐労流なれとも皆ハ富士山下
のお坊ちより主て学の一條の富士門徒ト一流シ
一致流ハ本法寺妙光ち本尚ち立本ち妙傳寺
本田ち頂妙ちなり妙顕ち八坂切冥山下云本
田ち〻多日三十要法ち妙顕ち
一ちその並るを日豊上人本田ち並まてちも

うまたくちて板本国防原〻ちり逐さ更ら
き原法寺ちさお要〻ちるり本田ちの一代日静
上人ハ多氏の内室の青田〻り京ちて原さし
立ろくとちり主後打永の時又元ろる雲蓋
本田ちの兵部ち初きなり法華宗も不更
不施一流悲田宗一流一致宗一流徐労宗一流
富士門徒一流なりさるハお流なり

○慈遠ハ亀山の子青蓮院又号十楽院ち初

○なれど善蓮院の別当なるべし

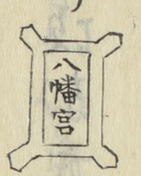
○東寺の寺領二千二百石ばかりの中へ七百石ばかりの役名にて買得なる山分ばかりを以て買得なるゆえ石ばかり供法等の修理の料中古迄ハ僧坊も建て二階ばかり齋堂へ出て一日を会せる為の道徳ある人を一老分として名一坊を近ごろ之を封彊ばかりの方迄昔の坊門と坊つとのみなり

さて右僧の内宝善院観智院金勝院など院家のごとくて下僧を云く坊をとなえ数多僧のごとくなりこれハ法僧なりより止そのごとく他人をとのみなりこれハ妻帯なり微塵のごとくなれども数珠の大師堂へ出る故なるべし大師堂の木像ハ東の方ハ二重の塔にて後白河院の石宣旨にて院の寄進舎利塔なり東寺ハ弘法の像而の方ハ地蔵観音にて何れも

宣旨つかはして御仏をまつらせ給ふ
さて大師の御の方へ後宇多院の
の給はせの像をうつし奉給ひ
白き袴毎年六月廿七日には忘れ給ふ事なり
後宇多院は東寺へ御の角れん入給ふにて
灵宝とて藏古つもの二ヶ所あり一ヶ所は火焼失
一ヶ所は今もつゝみあり兵乱のちぬすまれもする
ゝふい高雄寺一巻仏さのあるなり

ゝ事記録ゝつかとも手なあり 勅書院宣数通
つかり万里小路前内府 光 小倉親房ゝ等の後醍醐
院の命をうけゝ天下安寧の祈禱をいのりそと云の
奉書数通ゝ真頂東方の三宝とうて果宝元宝
頼宝とうて三人の名俗つかり吉野の皇后ゝまりて
説法つかり古をゝる玄義窺ふて諸宗の俗侶
住ゝるゝ大師ゝ勅法つかりてかゝる玄一家ゝ究め
宝額の俗五十口法ゝを祀天下の祈禱をなゝ来る

夫れ玄蕃寮西の朱雀より左京七条の
極武天皇の時より王城の鎮護と八幡宮を建立せ
後をそれを東ちの法ちくして八幡宮という大師の
額を掲てやうはその宝蔵よりの額も大師の
作と云彩色ありり



妙ちくそその雲を忘く
御室抱くハ恵果景よりの伝衣ありり紗ありて殊ち損せ
さて大師一恵景よりの附属のる名精の数珠
ありこれ後ちの帝修生の長老西月さりたる数

ちの如く唐の空忘の宝憲宗より大師一勅給の菩提樹
の念珠ありり西の端ハうるる精これハ性灵霊集ふも
おたり念珠なりさて大師の刺刀答これハ下地も
枚の木の上を唐木ふてそふよも木ありまとう西
今ハ大方をもて妙ちを象牙ふて細くとりたるが
のこる形を［　］め所の円さ刺刀のへたてあり
さて根迄これも下地ハ枚の木の上をそくの木ふて
ち勢たるもの縁ハ象牙これも大師の作なり

三如訴なり高サ六寸ばかり横三尺のおし
物なりさて後また獨鈷をもつ御影
如此なりけることえもいはれぬ
縁起十二巻絵八生伝光伝と云伝よもてなれ
ばハ位の〳〵ものの二色ハ別の事とも詞書
とは代の堂上方の直より合書の如のものり
第八後光明院の御宇寄近ふてさて御遺言一
巻泥北名物之奥ふ空毎水と名のり弘仁の
年号ありこれハ高野のこうそうを貴言之
文あるく高野の四室房舟の事なとかり今言ふ
ふる内遺言ハ元亦るのなり此の附ふ愛さ
なることもなきかく六通続皇ちを長老の文祀
とふるもかりこれハ御の通仁ちの六通とりふ
ふにあるへく拠ちを七月の六通奈の数後
とおしてあちくさをなり又説ハ四月年
頭の祝義ふ多目二百迄ハ来ちへ拝くとも云

さて傳教への書翰又一巻ハ秀次の
時真山上人をもつて此所へ
今一巻ハ紛失今三巻のこる各類の物叡山へ
ゐるところなり又傳教の返るの
書翰をあるこゝろなりしを叡山へとゞまるさゝれとも
叡山みて滅してこゝハなし
天長 人千歳莫
肆年 忘号上都

三月 神護国
五日 真言寺ゟ
書ス 僧都金剛
遍照

下と上との間ゟ出きめり
下ハこのくいまゝなたものと
うら上ゟ大文字ゟて
道詠ゟり

又唐ゟ持来の品物并書目録一巻帰朝の日ゟ
船中ゟて書付通ゟ 天子の叡覧ゟ奉ゟ
即訳ゟゟ勅作あり 舎利ハ十六粒ゟりいまゟ
正月の中修法のおゟるゟ 里ゟゟ付法伝一巻

直言祖師傳記心経一巻 倫伽経一巻 又宝蔵
一帖の大般若経 同六十二年の内 小八名挙げ
又八祖の像 絵八唐絵筆八不分上の書付と像と八
大師の筆 その外損じ上り八方々の梵号
八梵号

畫像

唐 翔

八祖各の名書付なり

○東西本願寺 号滑谷 佛光寺 高田 錦織寺 江州
鯖江 太玉門徒也 錦織寺流 芳春寺 京にもこれ
也 芳春寺 京のもこれ名字絶てなく

○南都の興福寺の内 一乗院と。 大乗院と
ゟ事 ゟその内 大乗院八大寺を修ゟる
一乗院 ゟ勢職を申つて十ヶ度のいる
大乗院一代ゟ一乗院 ゟ一代大乗院一統まで

さても勢職さへある公卿たちは頑学と
云て奥福ものち侶の頑学を一乗院の方々七人
擇ぶ大乗院の方々三人と合十人頑学を擇ぶ
この外百石の知行を支配してをらるゝを十人を
日学衆とて門主の内にて万事内法のみ
まて裁判をいたすなり延宝二年々大乗院殿
大舎を修をられ一乗院殿よりも勢を譲
られ大乗院方よりうをあとらんと云一乗院 真敬 親王

より位らるゝやうになりまた代学の一乗院の一代
々大慈院と云隠居ありこれ〳〵の方家よりの朱下の
物々寺勢ハ一乗院殿次ぎ大乗院殿一派されど
実やうの文言又南都代々も帝墨をうけ勢
職のゆへハ一乗院殿ん楽事を云やうもなり すべハ
この通りなれハこの方よりハ派をとるやうなれど
この方辞退申次ぎそのゆへ
ここて大乗院方より院家の坊官をたらし江戸

許らる折節永井伊賀殿京邸所司代 光溝口
豊前も在京して吟味の上ふて伊賀殿上京ら節
ら任さて豊前も南都より私のわせ一乗院の
方のも家老一人坊官一人大乗院の方のも折
まて豊前殿伊賀殿へ右の者人を引渡を伊賀
殿ら任せハ今度寺勢徴の儀に付ハ戸ふて各一ト通
やうとのるこ口上なれとも差れおてハヤきを
そこ初もかるくより伊賀殿口上城書をてハ実る
即よみて守きれんとて伊賀殿自身ハよこの
書をを二通こしらへそれを各方へ御渡しこれを
南都へ持参ふて奉門主并ら僧坊官へもやされ
よものるこをなるこ先京ハとも百石の料
なるより一乗院殿いれの者やうまて引頃当ハ
十人まて数をかぬるもこしらへ右ハの者の紛ハ
寺勢の場ふころるもの切口上覚
一乗院殿寺勢辞退在ら大乗院殿一寺

勢可有勅許但寺六日之日付ニて為要用大慈
院殿へ御先代之御条目准之寺中仕置
之儀ハ寺勢高禄より事可為先
規ハ勿論一乗院殿へ御朱印之上ニ大乗
院殿へ御朱印可然ニ付而江戸へ申遣す
筈之
処
一乗院殿ハ新大寺
六日と云ハ大寺ハ七日のものゝ心
と仰られ六日目之方や大乗院より勢禄を

う参とり口宣も六日目の日付ニて御とり候
うれん一乗院殿の規模なり大乗院ハ一乗院より
ハ一等下座ニなれハなるべく一乗院方へ
理もたゝず申ニなりきて一乗院殿ハ知行多百
石の上ニ百石学問料ハ大乗院殿を
九百石ニ高一門ハ十六人なり

○貞享元年六月廿一日於西侍宅南部一乗院
光大乗院へ書付ニ而渡自是ハ主坊官

該た支条名を書付て左京亮へ一通ッゝ返ス

一ヶ条ハ　大乗院門跡て年寄勢識御辞退
一乗院御門跡御再住向後従　禁裏可ニ仰
おゝ条辞退競望ニ付事

一ヶ条　一乗院御門跡維摩舎遂講ス
六日ゟ勢識初住ゟ之親ニ可ス

一ヶ条ハ　大乗院御門跡ハ維摩舎遂講以
後ハ寺勢識ゟ之親たるへきニ

寺ニヶ条ハ院家寺勢識ハ妻ゟ閑住或若年或
老裏ニ付ゟ之補院家権別当事向後一乗院
御門跡御元服ヲ以て寺仁被ニ仰ニ可ス
一ヶ条ハ八月次恒例ニ舎武等ハ寺勢裁判

○
三公の山号ハ新堂ゟ阿弥の号ニ十八ゟり臘の
あり次ゟゝ名を法ゝ有ゟゝ名ゟ有ゟ

○
傳教於唐朝伝仏院ニ住所ゟ大系地号大系
者按擬経師ニ住所ゟ大系昔系ニ字水石大系

又山号奥山共被呉朝之大系自双魚
吐水汲其流山地之山水仰被魚口水故也或号口律
水引色短色亦在水之後急事乎
法華日蓮宗二十一ヶ寺
妙顕寺　立本寺　妙顕寺一代　本法寺　中山派
頂妙寺　中山派　上人開山　本国寺　日朗御戸
妙満寺　身延　本満寺　八本国寺
未寺　かゝり
右一致

妙覚寺　妙顕寺ノ内ヨリ出　本隆寺　日開山日真
大覚伯西開山
日開山日中
妙蓮寺　開山日秀東金ト云　本能寺　妙蓮寺ヨリ出
所々本寺アリ　開山日立
要法寺　富士門徒　寂光寺　妙法寺ヨリ出
妙満寺　妙寿寺出自本満寺　本善寺　越後本乗寺末派
右猶劣　妙本寺　立本寺ノ内ニ有リ　本隆寺一派
本門寺　大妙寺　妙顕寺内ニアリ　芳心条油小路ニアリ　ソノ号地
本覚寺　妙満寺内ニヤリ　永院村ニテ六石妙顕寺内大妙院領
右内寂光院ハ近代シテ妙伝ヲ以一ヶ寺未タ寡
なりとそ

妙る寺ハ妙海ち流ゐて二十可寺の内なりき尼安の

本覚寺
妙満寺内（ニアリ）
妙本寺 立本

内ゑ妙海ちの一代上人この内一隠居ゑてちゐは久を
院と云ゑゝめもゆゐもまちなんともをの一代のえん祖
説法ゑて整昌ゑてきまつく妙るちるハえ云ゑる
あまつさゑ義の訊経をゑゝもむるやうゑ近ゑろか
海寺より望れをかまふ久ゝゑるゑゑやゑるふ
なりてけつくな海ちの頂けゑる今ハめゆふもおち
ゐるなる今一ヶのおちの名ハ妙伝寺のなるゑゑを云の考

○法華宗の中山派（派）といふハ古ハ素蓮なり今の頃妙ち
○堺ゑゐ寺本法ちなゑこの派（派）なりちゑはいゑゝハ素
○蓮ゑてなるゝ中山派（派）るゑゑて素蓮なるを中山
古山伏なりゑを素蓮のの山伏ゐて何りなゑ日蓮の
寺子ゑるゐりこの派（派）也ゝえこの流ゑ別ゝて祈禱を
なゑこれふを幣をきりて壇をかをるゑ
○山伏修験道ゑ五派（派）なりゐるゑゑ三派（派）ゐるゐ
ゑ竜院報恩院大法院なり之を顕徳院伝

二流一作流

法院二流ニ来合セテ五流ナリ　サテ先生ル三十二人ノ内ニ後ノ入峯ハ光海院猶子法ノ善法ノ善院ハ先人ニテナク後院ハ先院ニ同ク上皇院ニ准ル若王子也但ノ院ヲ熊仙院ノ積善院伽耶院ノ

○五條ノ橋ノ下ニ法城寺ノ流阿倍晴明建鴨水ノ流ル毎流ニ水ヲ成士ノ人ヲテ名ヲ付ケ給ヒシヨリ名流也良法法寺ノ庵人来テ水ヲ釜ノ

必焼ムト欲シテ焼ケリ

○宇治平等院　後冷泉院治宇永承六年三月十八日大政大臣頼通公建立　扉記者陽成院之流大和守正四位下源兼行書　兼行上總介兼房之兼行序孫上總介延幹男

後三條延久三年十八應撰書太極殿之額

宗綱平等院扉記者源俊房之書ト云リ

可考

○大坂まて信もろ一對揖の門まハ顕如上人こあつ
らいをうくるもをまて恩教如門ん〻て無〻河内一とり
のくうふより来初一別まて教如のまゝつまこ
教如の者をうたてこれ西門まの之祖ゝて惣領
筋こ

○
三條法林寺中興圓雄僧正袋中上人良仙上人

○
和顔秋天　花色春天

○
吉田の神　竜院のまを考るに角山ハ九江とゝて南
禅寺の傍なりこの傍唯ハ即吉田の社家と郭志倶
〻手ありこの兼倶ハ吉田の神原も両祠ゝ
○
古よりて神道の護摩なきを依てそれふりて
神竜院を建立ゝて吉田の九江をまつ〻吉田の
社傍ゝ次今の竜禅寺の流なり志倶ハ寛文十
年の頃より八百石十余年ありてくなりて吉田
陽居の福壽院ハ遍妙院と云

○遍照院を大通寺と云真言律の寺鎮守を六孫

○王城ノ

（狐塚ハ狡生ノ之類ナラン故ホハ紫相石ノ類ナラズヤ）狐塚トイフ不ノ有処モ此ノ辺ナルベシ古ノ墓所ト云

○西八條ハ今ノ西地ニテ昔ノ西市ノ地ナリ

○六宮ハ今号遍照光大通智勝ノ皇子ノ八条ノ居所ナル

建立ナル積善右大臣実能ノ後室坊門房信

清ノ娘ナリ依テ尼寺ト云

二階町ニ（今ハ町ニアリ）安禅寺不動ナリ　法皇授ノ

御座ニテ云々ノ故ノ坊アリテ住セ

宗旨不動尊ニアリ愛染明王ノ今故ノ坊

安禅寺一寺ニテ安祥寺ノ法印尼ナリ

○皇女ノ御ノ故ノ坊ト云懸隔ノ寺ナリ今故ノ坊

号安禅寺ヲ勤ル事ヲ

○釜ノ座二条上ル薬師ハ二ツノ所ニアリテ事ヌ

かと云事ヲ二ツノ説ヲ誤テ移標ト云歟徳堂

薬師寺と云一寺あるのみ

○川崎の観音ハ清和院なり

○梶井ハ梨本となる又毘融院と云竹内ハ曼殊院と

○山寺社と法流廃流院家平法出世非老例多者

雖多輩　東照宮以来御朱印并諸書付ニ通一

乗院門主而已を其沙汰と申なり